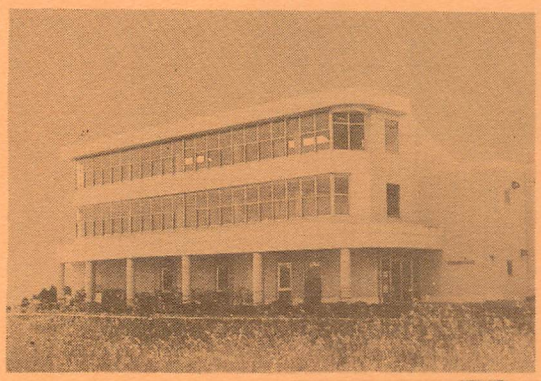
48号

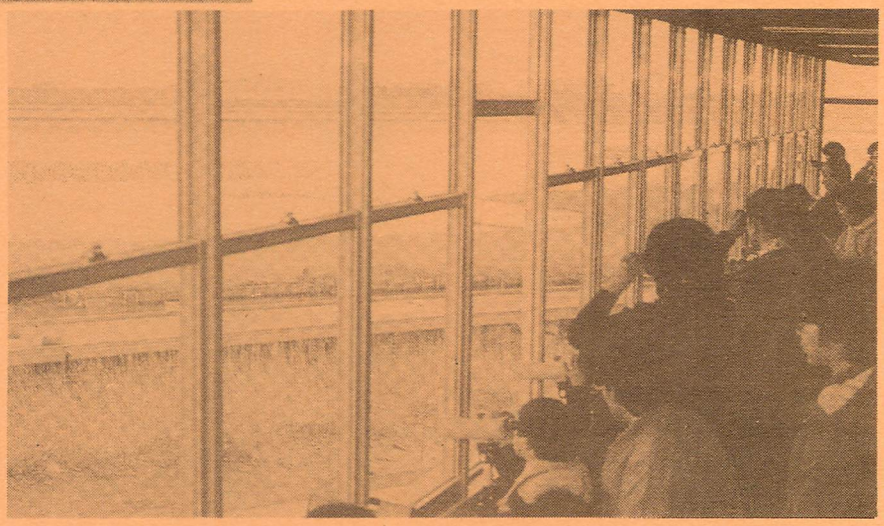
愛鳥教育

1996.3

全国愛鳥教育研究会



千葉県行徳野鳥観察舎



野鳥観察舎観察室より保護区を望む　（案内パンフレットより）

愛鳥教育　No.48
1996.3

目　次

巻頭言 ---------- 江袋島吉　3
夏期研修会報告 ---------- 杉田優児　4
講演
　行徳野鳥観察舎と私 ---------- 蓮尾純子　6
実践報告
　地域に学ぶ環境教育 ---------- 原　久男　10
　西小学校の愛鳥教育 ---------- 桐生幸子　15
　校外学習での自然観察ビンゴ ---- 平田寛重　22
『野鳥シート』販売のご案内
　および　モニター協力のお願い - 小野紀之　30
『野鳥シート』解説 ---------- 平田寛重　32
鳥たちの街ものがたり－PART 3－
　“冬の使者”カモ軍団の隠された秘密
　……そして、カモ軍団メンバー
　---------- 佐々木晶子・杉浦嘉雄　37
論説
　環境教育と愛鳥教育 ---------- 平田寛重　41
新役員名簿 ---------- 42
役員改選 ---------- 43
編集後記 ---------- 43
愛鳥クイズ ---------- 44

巻頭言

新浜よ永遠に

ー夏期研修会からー

会長　江　袋　島　吉

本年度の夏期研修会は、30年ぶりという晴天続きの猛暑にうだる一日、千葉県の行徳鳥獣保護区で、当保護区観察舎勤務の蓮尾純子氏を講師として行われた。研修の概況は別項の通りであるが、以下、見聞きしたことをもとに印象記を述べる。

◇　新浜　～　行徳、浦安海岸一帯の呼び名

千葉県指定の行徳鳥獣保護区は、地下鉄東西線行徳駅の南西約2kmにあり、隣接する宮内庁所轄の新浜鴨場（皇太子殿下御成婚ゆかりの地）と共に、行徳近郊緑地保全地区（約83ha）を形成し、古くから“新浜”と呼ばれていた。

当保護区は、北側を鴨場との境界林、南側を湾岸道路に沿った高い塀によって区切られている。東西の付近一帯はマンションや団地群、学校、工場、住宅が建ち並び、市街地の真ん中にぽっかりと取り残された形で、窮屈そうなたたずまいだ。西側の一隅にある行徳野鳥観察舎は、旧館（昭和51年建設）に増設の上、昭和54年に新規開館したもので、鉄骨3階建延べ606㎡あり、観察室（約200㎡、望遠鏡44）、展示室（約111㎡）、ＡＶ室（約58㎡）、図書室その他を備えて威容を誇っている。また、別棟に疾病鳥収容・回復訓練施設棟（平屋・約133㎡）がある。

◇　消え行く東京湾の干潟のなかで

かつて、奥東京湾一帯特に千葉県側は白砂長汀の大潮干狩地帯として、また、多くの干潟やアシ原は野鳥の宝庫として著名であった。

昭和30年代後半の高度成長経済や、東西線の開通による急激な都市化によって、海浜の埋め立ても急ピッチで進行し、新浜地区も消え去る運命かと思われた。

その時に立ち上がったのが、一円の野鳥愛好家によって組織された“新浜を守る会”で、熱心な運動の結果守り通した“新浜”は都市部に残された珠玉のような自然である。

新浜と双璧を成すのが東側の谷津干潟（約40ha・ラムサール条約指定）であり、存亡の危機に立っているのがその中間の“三番瀬”である。

◇　講師　蓮尾純子氏のこと

“新浜を守る会”創立メンバーのなかで、当時三人娘と謳われた女子高生が話題となったが、そのうちの一人が蓮尾氏だそうです。高一の時から新浜の風情に強くひかれ、鴨場のサギ、干潟やアシ原に群れる水鳥に、無上の愛着を感じていた乙女心が、この運動に駆り立てたとのことである。

運動の結果、多くの不満を残しながらも生まれたのが現在の保護区だったが、氏は新浜に対する思い入れを断ち切ることができず、昭和51年に観察舎が設けられて、住み込みの管理人を募集した際には、御夫君と共に率先して希望、観察舎と保護区の管理・整備に携わり今日に至っている。

氏が最も努力をされたのは保護区の環境改善で、あまりにも単調で貧弱な埋め立て地の環境に手を加えて、池や水路を掘り、入り組んだ塩性湿地や入江を作り、小島を築き、干潟の底質を改良するなど、小鳥の楽園を目指して取り組み、失われてしまったかつての行徳を復元することに尽力された。このあたりの事情は、当日の臨地指導の際にも垣間みることが出来たが、地道で息の長い活動を続けておられる姿に、感ひとしおなものがあった。

氏は、また、昭和51年以来、綿密な観察記録を取って、同年創刊の“行徳新聞”に、毎月1回“新浜だより”として掲載し、観察舎のたどってきた歩みの一端を紹介されている。

さらに、“新浜だより”や“野鳥観察日記”などの著書も出版されたほか、日本野鳥の会東京支部の機関誌“ユリカモメ”にも毎回のように健筆をふるっておられ、その他講演にシンポジウムに翻訳にと、八面六臂の活躍をされている。

以上、辛うじて生き残った貴重な新浜～行徳鳥類保護区の概況、ならびに、創設以来の観察舎に、御夫君と共に住み込み勤務をしながら、長年観察舎の充実、保護区の復元・環境整備に尽力をされている蓮尾純子氏の横顔の一端に触れたが、改めて“新浜よ永遠に”のコールを送る次第である。なお、当日御協力をいただいた田久保晴孝氏を始め、御関係の皆様に対して厚く御礼を申し上げます。

夏期研修会報告

千葉県行徳野鳥観察舎にて

常務理事　杉　田　優　児

平成7年8月18日（金）、千葉県行徳野鳥観察舎にて夏期研修会を行いました。

午前10:00に集合し、午前中、蓮尾純子氏に御案内いただきながら、保護区と施設の見学をしました。

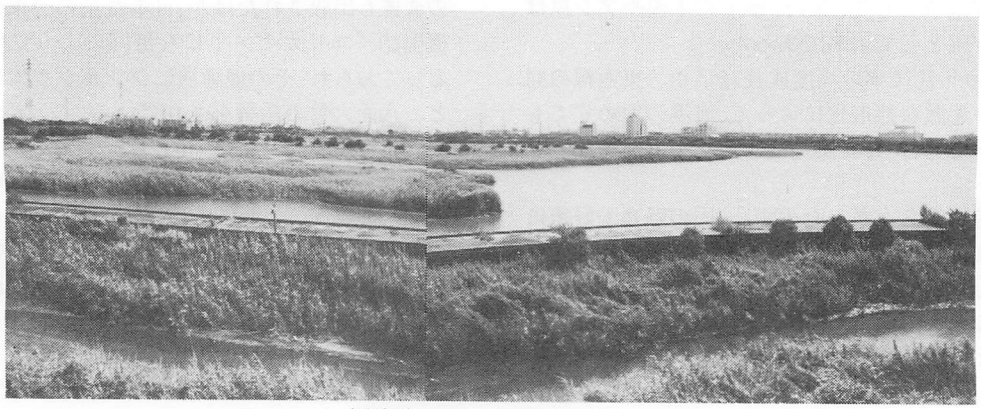
保護区は、基本的には、内陸性湿地として設計されています。環境の変化に伴い、水車や池の設置により、水の浄化や多様な生物の棲息に苦心されていることをうかがいました。

午後は、蓮尾氏に御講演いただきました。埋め立てによる開発で「新浜」が失われていったこと、少しでも新浜の自然を残すべく保護運動を展開なさったこと、野鳥観察舎の職員として保護区の自然環境保護に携わってこられたこと等々、詳しくお話いただきました。内容に触発されて、質疑応答も活発に行われました。

講演の内容については、P6以降に要約しておきましたので、そちらを御覧下さい。いろいろな事例を引き合いに、詳しくお話しいただいたのですが、紙面の都合上、かなりの部分をカットせざるを得ませんでした。御了承下さい。

蓮尾純子氏

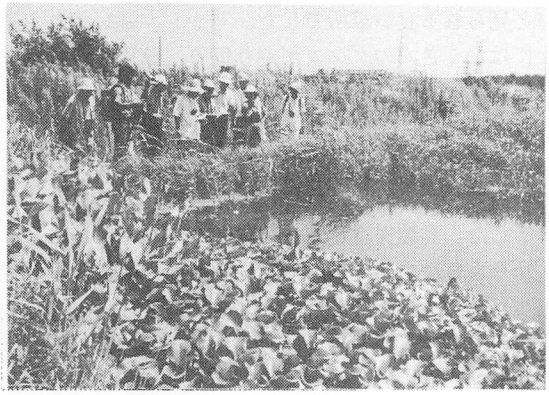
保護区について、事前の説明を受ける。



観察舎からの保護区の遠望

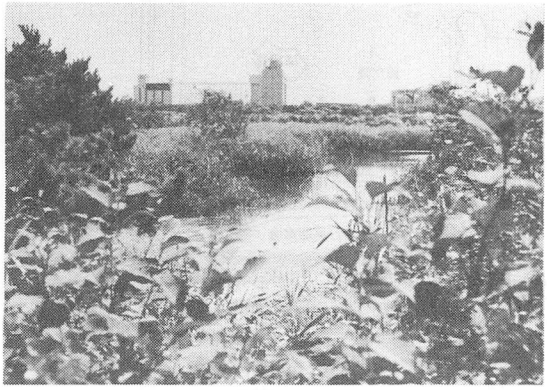
夏の暑い盛り、草も高く生い茂っている。しかし、これが生物にとっての生息環境ともなる。観察路の除草も一苦労であることがうかがえた。

富栄養化のため、水面の藻を取り除くのは大変な作業。しかし、それを行うと、いろいろなトンボが飛来するようになるとのこと。

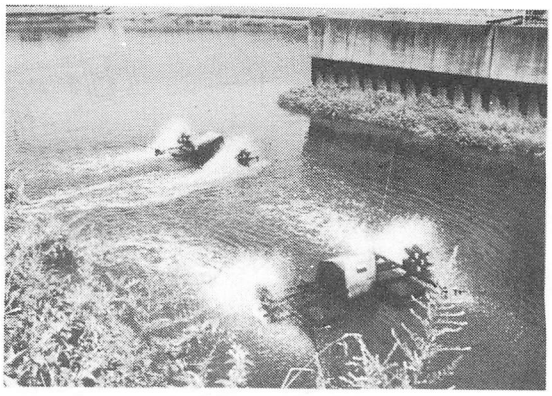


棚田形式にした池。植物の種類を変え、次々に隣の池へと水を流していくと、生物浄化の機能により、汚水が浄化されていくとのこと。

池の状態は、それぞれに異なっている。



入り組んだ入江と、なだらかな水深の変化が、多様な環境を生み出している。



フロート上に固定された電動モーターによる水車。これによる酸素供給が、生物浄化の機能を促している。水車は、ロープで岸に係留されている。

講演

行徳野鳥観察舎と私

千葉県行徳野鳥観察舎　蓮　尾　純　子

「新浜」そして鳥との出会い

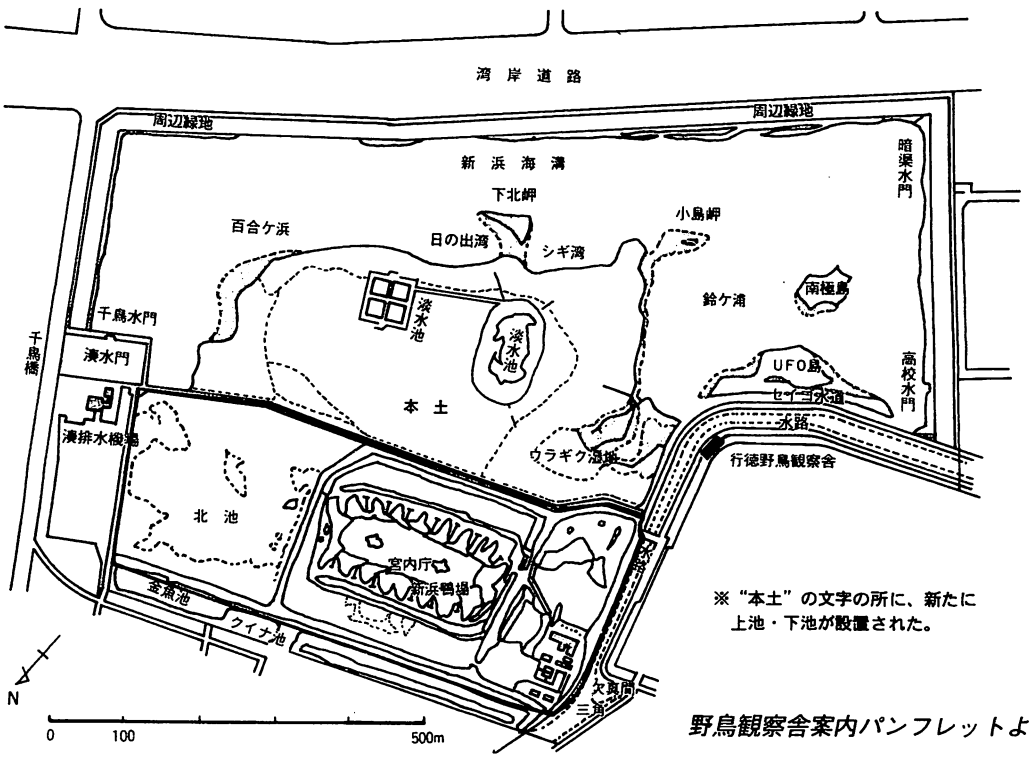
初めに新浜に関わった頃のお話をしたいと思います。私が初めてここに来たのが16歳の時です。地下鉄東西線はなかった頃で、本八幡からバスに乗って来ました。当時の行徳は、今の姿からは想像がつかないほどです。バスを降りて５分も歩くと道がなくなり、そこから先は一面の田圃です。あちらこちらでオオヨシキリが鳴き、鴨場や付近の松林には１万つがい位のサギがいて、一番多かったのがチュウサギだったと思います。鴨場の中は土手と溝が縦横に巡っているのですが、土手沿いのそこら中にサギの巣がありました。そのサギたちのざわめきや動きを今でもよく覚えていますが、その時から私にとって、鳥は、場面の中の美しい光景とかではなく、同じ地面に足をつけて生活している同じ立場の生き物としてしか考えられなくなりました。それが私と鳥との出会いだったように思います。それから何度もここに通いました。

進む埋め立てと開発

しかし、その頃から埋立がすごい勢いで進んでいきました。あっという間に通い慣れた道も、見慣れた池も、どんどん土の下になるという状態が続きました。

元々ここ（行徳野鳥観察舎）は、「丸浜養魚場」といって、とてもきれいで静かな場所でした。その昔は塩田だったそうです。幅が50m位、奥行きが200m位の池が14枚位あって、全部養魚場でした。ここに来れば必ずカモの群れやオオバンがゆっくりと見られる良い場所でした。しかし、通い慣れた道にはたくさんのダンプが走り回り、葦原も溜池も蓮田も数箇月のうちになくなっていきました。これにはとても驚きました。

新浜という場所がとても大切な場所で、国際的にも知られた場所だということは、私たちも聞いていました。鳥類保護連盟から陳情書が出されたことも知りました。しかし、そういうもので何か動きが変



※“本土”の文字の所に、新たに上池・下池が設置された。

野鳥観察舎案内パンフレットより

わるわけでもなく、私たちがとても大事に思っていた場所が完全に姿を消すのは時間の問題だということがわかりました。このままでいいのだろうかということを非常に強く思いました。

「新浜」保護に立ち上がる

それで、大学の入学試験が終わった日から活動を始めました。とにかく、大事なことを訴えることはしなければなりません。そこで、日本野鳥の会東京支部の中でとりあえず話し合いの会を持ちました。40人位の人が集まりました。しかし、環境保護や自然保護ということで何かを始めるといっても、当時は何から始めていいかわからない状態でした。それで、話が具体化した時、気付いてみたら大学1年生の女の子3人と、高校1年生の男の子の4人で資料まとめをし、いろいろな「兵隊役」をすることになってしまったのです。署名運動もしました。野鳥の会も伝統がありますから、いろいろな所でつながりがあり、わけのわからないうちに議員さんと話をしたこともありました。

後から考えてみると、この運動は尾瀬の東電の貯水池反対に次いで、自然保護と名のつく2番目の運動になったのではないかと思います。同時期に「江戸前のハゼを守る会」というのがあり、その方がちょっと早かったのではありますが。

また当時（1967年）は、杉並で光化学スモッグがおきて女子校生がバタバタと倒れた年でした。それぐらいの高度成長期の中で、自然保護活動というのは、文字通り国策に反する行為だったわけです。発言することすらいけないことだったのです。しかし、水俣病などもはっきりしてきているし、立ち止まって考えなくてはという時代になってきていたのではないかと思います。そういう時に大学1年の女の子3人というのは、マスコミにとっては「3人娘」として取り上げやすかったのでしょう。

他にも同世代の学生が10人位集まってきて、毎日どこかしらに集まって仕事をしていました。先がどうなるかではなく、とにかくこういった問題があるということを訴えよう、知らせようという感じでした。ほとんど大学にも行かず、出来ることは何でもしました。

私たちは、マスコミを味方につけていたので、マスコミ請けするような活動をいろいろしました。テレビに出たり、デモ行進をしたり、写真展を開いたり、現場での探鳥会などを行いました。署名運動を行い、誓願書も出しました。

保護運動の成果が現れる

その結果、行徳地区にあった区画整理組合のうち、1箇所の認可が一時差し止めになりました。ところが、それにより困った地元の方達から逆に野鳥保護反対運動が起こってしまいました。今でしたらそんな運動どこかおかしいと思うでしょうが、当時はそちらの方が正当なのです。マスコミは“野鳥か人か”という感じで随分取り上げました。その結果、全国的に知られるようにもなり、千葉県は『行徳地域問題審議会』というものを発足させました。その結果、一つはこの御猟場を中心とした地域を内陸性湿地帯として確保すること、もう一つは、将来の埋立計画との関連において沖合いに干潟を確保するという方針が出されました。このような結果として、ここが確保されたわけです。

保護区の設計にとりかかる

当時、私たちが考えたことは、鳥が集まる条件とは何だろうかということです。今だったら、水鳥にとって大事なのは水で、それを支える生き物だという知識はあります。しかし、このようなことは、少しずつ積み重ねて得られるものです。

それで、28年前に鳥類保護連盟が中心になって立てた計画というのは、ひたひたの水際からだらだらと深くなり、適当に池などがあるような地形にするというものでした。しかし、実際の埋立工事では、海の深さに指定がなかったものですから、海の土砂を使って埋立が進められたのです。そのため、本来30～50cm位の浅い海が4mもの深さになってしまいました。おまけに、効率が良いということから、大きなポンプを使って土砂を海水と一緒に汲み上げて囲いの中に流し込む“吹き上げ式”が採用されていたので、粒子の粗い土砂が先に沈み、一番上には粘土がたまります。それで、この保護区では設計図の上では泥の量が足りないということから、周りの埋め立て地の粘土を含んだ泥水がここに流されました。ですから、この保護区は海底・陸地を問わず、表面から60～80cmは粘土の層です。今でこそ草が生えていますが、生き物にとってはあまりありがたいものではありません。例えば、ここは2枚貝がとても少ないのです。

こうしてできた保護区ですが、私達にとってはつらくて通えないという面もありました。自分の知っ

ている所はみんな埋められてしまい、この場所は確保されはしましたが、15分もすれば通り過ぎてしまえるほどの規模しかないのですから。鳥もいないし、これが残骸として残されたのかと思うと感慨深いものがありました。

野鳥観察舎の職員となって

その後、この場所に観察小屋が出来るので、住み込みの職員を探しているという話を聞き、主人と２人で働き始めました。その後、あれよあれよという間にもう20年もたってしまったというのが実感です。

しかし、その間、鳥はどんどん減るし、周りの環境も悪くなっていきます。私達が来た当時はスズガモが何万といましたが、70～80mの高さの高圧線が通ってからは、入らなくなりました。20年前に１年間24回の累計が、何十万羽とすると、今は１年間の累計が４千何羽とか５千何羽といった状態です。

それで、去年、やっと、ここの再整備を行い、水鳥にとって都合のよい環境を作るということが決まりました。鳥がいなくなってからでないとお金が使えないというのは悲しいことです。それでも、先日、東京港野鳥公園・葛西臨海公園・谷津干潟の観察舎を見てきましたが、鳥のために、鳥を観察する人のために、堂々とこういう整備の仕方が出来る、そういう時代になったのだなと思いました。

私がここに居続けるのは、昔のしがらみで足が洗えないということもありますし、まだまだ何とかしなければならないと思うこともあるからですが、やはりここはおもしろいという思いがあるからです。

水車による水の浄化

今日、御覧いただいたように、今、私達は、水車を使って水に酸素を吹き込み、それで水を浄化することを進めています。この水車を動かし始めたのが1986年ですから、もう10年になります。一番最初に入れた水車もまだ動いています。これは、沖縄大学の泉教授からアドバイスを受け、トヨタ財団の研究コンクールに応募して始めたものです。

水車を動かし始めて10日もたたないうちに、水の色が違ってきました。その時は、びっくりしました。水車の所は黒く、その向こうはもちろん真っ黒です。しかし、水車を過ぎるとトプ川の色ではないのです。ＤＯメーター（溶存酸素量の測定器）で計測すると、水車のところで酸素量が上がります。

初め、ここでは無生物状態が続いていました。普通は流れさえあればイトミミズとかユスリカくらいはいるものなのですが、それもいないのです。ですから、服にはドブの臭いがつくものの、最初のころの底生動物の調査は楽なものでした。

２箇月目、水車の真下で初めてユスリカが１匹見つかりました。このように生き物は確かに応えてくれるのです。今、ユスリカとイトミミズを数えろと言われたらやりません。あまりにもたくさんですから。今は、ボラの子が泳ぎ、カワセミが来て、カニがたくさんいて、トンボが卵を産んで、コイが産卵します。

ここまでこぎつけるまでに、ずいぶん年月がかかりました。直線的に状態がよくなってきたわけではなく、汚染物質が入り込んで逆戻りということもありました。

予備研究の時にもらったお金は50万。水車を１台買って、電気工事をやって、ＤＯメーターを買って終わりでした。その後、本選考に残り、２年間で500万もらいました。そのお金で、先程お目にかけた上池・下池を作りました。そして、水車を２台増やし、調査・研究を継続して行いました。

棚田形式の池による水の浄化

湊新池は、上池・下池の反省から、浄化される池はうんと浅く、鳥がいる池はもうちょっと深めにと考えました。そして、池を掘った土で斜面を作り、浄化用の棚田としました。

傷病鳥の保護と世話

この他、主人が獣医であることもあって、鳥の病室をここに来た時からやっています。結婚した最初の年はコアジサシと同居しました。部屋には全部新聞紙が敷いてあり、真ん中にござが２畳分だけある。その上にちゃぶ台を置き、座布団を敷き、夫婦差し向かいでご飯を食べるのですが、その周りをコアジサシが歩いているといった具合です。

そういうところから始めて、今は200羽位（40種類近く）抱えています。９月位までは目一杯こちらにかかってしまうので、保護区の中に行けるのは、こういう御案内の時だけです。特に傷病鳥の救護施設が４年前にできてからは、飼育係としての生活が結構忙しくなりました。しかし、これも11月頃には一段落しますので、休みの日には保護区の中に入ってあれこれしたいと考えています。

保護区の維持とボランティアの方々の協力

それから、いろいろな方々がお手伝いに来て下さっています。草刈りにしても何にしても肉体労働で大変ですが、生き物たちは確実に応えてくれます。そのように生き物に賛成してもらい、教えてもらいながら、この先やっていける仕事というのは大変楽しいことだと思っています。ただ、私はだいたい留守番で、現場に出ていないのでこんなことを言っていられますが、つらい現場の仕事は主人の仕事なので「軽々しく何でも引き受けるんじゃないよ。」と、よく言われたりもします。

「新浜」再現の夢

周りの保護区を見てきますと、行徳は広い割には鳥の数が少ないと思います。再整備計画ではずいぶん予算もかけられるのですが、どこまで昔の新浜の自然を復元していけるかは解りません。区画整理をやっている組合から、昔の蓮田の土の地層をもらうことになっていますが、もしかすると維持されている種子があるかもしれません。昔の新浜の継承をそういったことでもやっていきたいと思っています。ホタルは、カワニナが何とかなれば幼虫はもらえることになっています。また、手間はかかるだろうけれど、クイナやタマシギのように、今ではこの辺に見られなくなってしまった種の再現もやってみたいと思っています。

【質疑応答】

《質問》　水車について他の実践例があれば教えて下さい。

《答》　水車を使った方式で成果を上げたのはここが初めてです。他の所では、私は現場を見ていませんが、茨城県のある町で廃水処理に利用しています。また、土浦の霞ヶ浦で使っています。エアーレーションは、無酸素状態のたまり水には、圧倒的な効果があります。ただし、やはり限界はあります。丸浜川でもフナ・コイまではいきましたが、アユ・ウグイとなると難しいようです。

《質問》　水車の台数を増やせば効果は上がるのですか。

《答》　１台の時より２台３台の方が効果は上がりますが、何台もとなるとどうなるのか、まだ解りません。

《質問》　水深が深くても、水車の効果はありますか。

《答》　今使っている水車は１馬力のものです。効果が及ぶのはせいぜい２ｍで、それ以上深い所には水流が届かないと思います。２馬力のものだともっと深く届きます。

酸素があるということが２通りの効果をもたらします。一つは、酸素を使う生き物が生きていけるようになることです。もう一つは、嫌気性細菌が生きていけない状況を作ることです。

嫌気性細菌は、立派な生き物で、彼等も水の汚れを分解しているのですが、やることがゆっくりなのです。また、彼等の排出するものが、好気的な生き物に対して有害になることがあります。

水車で随時酸素を供給することで、少なくとも泥の表面は、嫌気的ではなく好気的に変わってくることは間違いありません。水車の酸素だけでこんなに変わるわけがないと思いますが、引き金になっているように思います。

《質問》　アシを刈られる目的は何ですか。

《答》　ここでは、水鳥を優先した生態系を考えています。一つは、水鳥にとってアシにおおわれた場所というのは有益ではないことが多いからです。開けた水面を確保することと、開けた水面に集まった鳥を人が見られるようにすることを意図しています。

もう一つは、アシという植物は、自己破壊的な所があって、分解が遅いのです。そのため、アシ原はだんだんに乾燥して、他の植物にとってかわっていきます。そうすると、水鳥にとっては不利益になってしまいます。

今は、海水面をいかにうまく確保するか、あるいは、開けた泥の場所をいかにうまく確保するかを考えています。

《質問》　手賀沼で、ホテイアオイを回収して肥料にするようなことをしているようですが、ここでも何か考えているのですか。

《答》　本当は、コビトカバを飼いたいのです。食物連鎖においては、食べて自分の体を作るだけでなくエネルギーとして使用していく分がありますから、生産した植物を消費してくれるものを入れたいと考えています。

実践報告

地域に学ぶ環境教育

―自然とのふれあいを生かして―
神奈川県秦野市立末広小学校の愛鳥教育

秦野市立西小学校（前秦野市立末広小学校）　原　久男

1　はじめに

本校は、児童数約850人、神奈川県西部丹沢山地のふもとにあり、学校のすぐ前を金目川が流れ自然に恵まれたところに位置している。本校の愛鳥活動が始まったのは、昭和57年の人権教育の研究が始まった時にさかのぼる。「自他の生命を大切にし、人を思いやる心」を育てることと、野鳥や植物を大切にすることに共通点を見出だした時からである。以来、愛鳥活動については、野鳥クラブや愛鳥委員会を中心に活動を継続してきた。

本校では、平成5年度より、環境教育の研究に取組むこととなった。環境教育における小学校の役割りは、将来、児童が環境へより良く関わっていくための基盤づくりである。

この教育で大切なことは、身近な自然や社会に十分にふれることと考える。美しいものに感動する豊かな感性を養い、自然や社会の仕組みの様子を学ぶ中で、その素晴らしさ・大切さに気付き、自然や社会に主体的に関わる力を身に付けていくことが大切であると考えた。そこで、本校では、今までに取り組んできた愛鳥活動や地域社会に学ぶ研究を生かし、環境教育を進めることにした。ここでは、本校の環境教育の概要と、愛鳥活動を含めた地域の自然から学ぶ活動、そして、どの様に環境教育に取り組んでいったかについて、昨年度実践した内容を中心に紹介する。

2　本校の環境教育の概要

(1)　めざす児童像と重点課題

『地域の自然や社会に学ぶこと』と、本校の教育で、開校以来大切にしている『自他の生命を大切にし、人を思いやる心を育てること』を念頭に置き、環境教育でめざす児童像を設定した。そして、めざす児童像に迫るために、児童に身につけてほしい資質・能力の５項目を環境教育の重点課題とし、研究を進めていく基本とした。

めざす児童像

① 動植物を大切にし、生命を尊重する子。
② 自然や社会などの環境に関心を持ち、考える子。
③ より良い環境づくりのために進んで行動する子。
④ 豊かな環境を守り、学校や郷土を愛する子。

環境教育重点課題

① 美しいもの、価値あるものに感動する豊かな感性の育成。
② 自然や地域を大切にしようとする関心・意欲・態度の育成。
③ 環境と人間との関わりについて考える知識・技能・表現力の育成。
④ 課題に気づき、環境を配慮した解決方法を見つける思考力・判断力の育成。
⑤ 環境保全や資源保護に進んで取り組もうとする意欲・実践力の育成。

(2)　学習の場

本校の環境教育は、地域に学ぶことを中心にすえ、教科・領域を限定せず、次に示す全ての教育活動を通して進めていくことにした。

ア、教科・道徳

各学年の学習内容を見直し、環境教育重点単元を決め、年間計画に基づき実践した。

イ、環境タイム

地域の自然や社会に十分に接する機会が大切と考え、環境タイム(Long)×(Short)を設定した。

① 環境タイム（L）……学級や学年単位の活動。学校裁量15時間を活用し、地域の自然から学ぶ活動と、地域社会から学ぶ活動の二つを設定した。

【地域の自然から学ぶ活動】
・鳥と友達になろう（年間2時間）
・みんなで調べる金目川（年間5時間）
・学級での飼育活動（常時活動）

【地域社会から学ぶ活動】
・ぼくの町、私の町の大発見（年間4時間）
・守ろう地球　ぼく・私にできること（家族と共に）
・植物栽培活動（年間4時間）

② 環境タイム（S）……クラス単位の活動。毎週水曜日の朝自習の時間を活用。児童の自主的な活動、教科や環境タイム（L）の準備、発展等。

ウ、特別活動、その他の活動
① 環境ふれあい運動（児童会活動）
『ふ』……ふやそう緑
『れ』……れいぎ正しく挨拶しよう
『あ』……集めよう資源（資源回収）
『い』……いつもきれいな末広小
② 委員会・クラブ活動を通して
③ 広報誌「コミュニティ広場」を発行し、家族と環境問題を考える。
④ PTAとの連携

写真①　草笛を鳴らそう……父母参観日

3　実践内容……環境タイム（L），（S）から

本校の近くには川幅10mほどの金目川が流れており、この川と周辺の地域を中心に学習している。

小学生の段階から地域の自然に数多くふれることは、自然に対する感受性を養い、自然の大切さに気付き、自然との関わりを考えていく力となるものと考える。このことは、本校の環境教育の重点課題①②③を満たすものであり、さらに④⑤への発展にもつながり、本校の環境教育で積極的に取り入れることとなった。ここでは、環境タイム（L），環境タイム（S）の中から、『鳥と友達になろう』と『みんなで調べる金目川』の活動について紹介する。

(1)　『鳥と友達になろう』

児童は入学以来、給餌活動をしたり探鳥会に参加したりして、学校周辺の野鳥に親しんでいる。

野鳥に親しみ野鳥を知ることは、『みんなで調べる金目川』での活動と共に、地域の自然を理解していく上での出発点となると考えている。

写真②　使ってくれるといいね……巣箱掛け

各学年では、探鳥会を中心とした活動を実施している。事前の準備、当日の探鳥会、事後の話し合いを通して、自然に親しみ、自然を理解し、自然と人とが共生していくことの大切さに気づいてくれるよう願っている。探鳥会では目標を下のように決め、各学年年間2時間を充て、これに理科や環境タイム（S）の時間を組み合わせて取り組んでいる。

主な愛鳥活動

	愛鳥委員会	野鳥クラブ	全校での取り組み
一学期	●年間を通して ・野鳥ぬりえカレンダー配布（毎月）	●つばめの巣の調査 ●年間を通して ・定例コースの探鳥会（毎月） ・ビデオでの季節の野鳥学習	●夏の鳥の野鳥カード作成（学校周辺で見られる野鳥のぬりえ） ●愛鳥ポスター（希望者） ●夏の学年別探鳥会
二学期	・野鳥だより発行（毎月） ・児童朝会での野鳥紹介 など	●金目川での水辺の野鳥の食べ物調べ ●巣箱づくり ●給餌台づくり	●年間を通して ・愛鳥発見カード（随時） ●冬の鳥の野鳥カード作成
三学期		●紙粘土での野鳥づくり ●巣箱かけ	●冬の学年別探鳥会 ●給餌活動

探鳥会での各学年のねらい

低学年……学校や家の周りにはたくさんの野鳥がいることを知り、野鳥に親しむ。

中学年……身近な野鳥の特徴に気づき、季節により野鳥の種類が異なることを知る。

高学年……環境と野鳥の種類や数に関係があることに気づく。

4年生の実践から

① *冬の探鳥会*

指導計画（全4時間）

事前指導

・ビデオ視聴（冬に見られる野鳥）……1/2
環境タイム（S）

・過去の野鳥クラブの探鳥記録から見られそうな野鳥の話し合い……1/2
環境タイム（S）

・発見カードをもとに見られる野鳥の最新情報を交換し合う……1/2
環境タイム（S）

探鳥会…… 2
環境タイム（U）と理科で

事後のまとめ……1/2
環境タイム（S）

クラス単位で、学校近くの弘法山周辺の農道や林を中心に行った。事前指導で、見られそうな冬鳥について話し合っており、期待感を持っての探鳥会であったため、目当ての、シメ、ジョウビタキ、ツグミなどの野鳥を自分の目で見つける事ができ、大変満足であった。

この探鳥会では、いつもはあまり見られないおすのキジが歩く姿を見ることができ、初めて見る野生のキジの姿に大喜びであった。

写真③　カルガモがいるぞ！　……学年別探鳥会

② *学区内のツバメの巣の調査*

ツバメは、本校の学区にはたくさん見られ、子供達も低学年の頃から見なれており、かわいらしく親しみやすい野鳥である。本校の学区では、5年ほど前までは、ツバメやコシアカツバメが多く見られたが、2～3年前からコシアカツバメが減り、かわってイワツバメが多く見られるようになってきた。そこで、4年生が、学区のどんな所にどんなツバメが巣を作っているかを調べることにした。

事前指導

・8年前の学区のツバメの巣（野鳥クラブの先輩の調査結果から）の様子を知らせる。

・学区で見られるツバメについて、巣の形を調べたり、体の特徴を鳥の紙飛行機に表したりしながら理解させた。

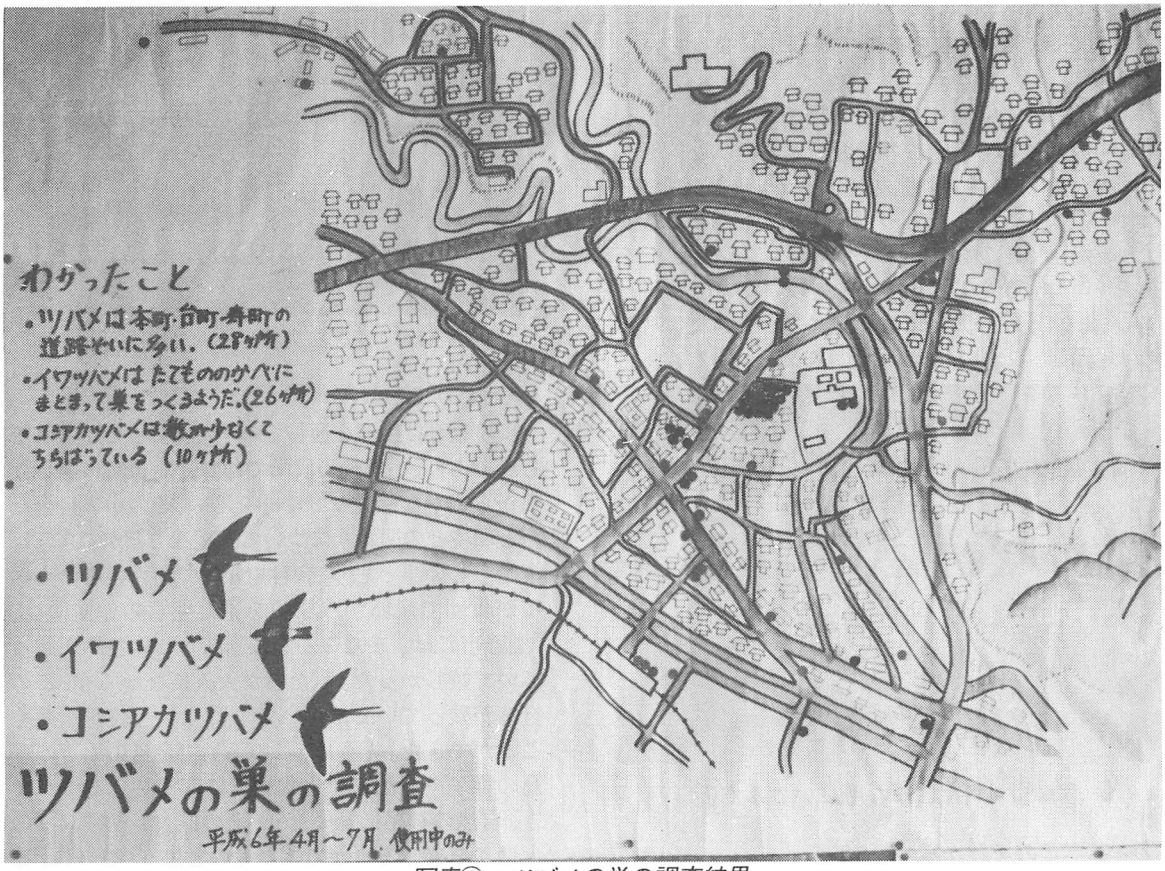
調査

・学区を5つに分け、自分の住んでいる地区について、現在使用中の巣の数とツバメの種類を調査用紙に記録した。重複記録を避けるために「○○さんの家に○○ツバメの巣が何個」と記録するようにした。

まとめ

各自の調査結果を持ち寄り、学区の地図にプロットしていった。8年前の記録に比べて、コシアカツバメが大幅に減少し、イワツバメが大きく勢力を伸ばしていることに気がついた。原因についてまで考えることはできなかったが、たった数年間でも、自然が大きく変化していることに驚いていた。

なお、この調査では、学区の人がツバメの巣に板を添えてやったり、糞よけカバーをつけてやったりするなど、野鳥を大切にする人がたくさんいることを知ることができたのも、大きな収穫の一つであった。



写真④　ツバメの巣の調査結果

(2)　『みんなで調べる金目川』

児童は、学校のすぐ前を流れる金目川を、遊びや魚取りや探鳥コースなどのフィールドとして親しんでいる。また、高学年になるにしたがい、農業用水としての活用や生活排水を流している場としての利用など、自分たちの生活と結び付けて考えることが出来るようになっている。ここでは金目川での様々な活動を通して、地域の自然に親しみながら、自分たちが川とどの様に接していったらよいかを考えさせる場としていきたい。そこで活動の目標を次のように設定し、各学年年間2回（5時間）の活動計画を立て、実践した。

活動目標

低学年……川原で遊んだり生き物をつかまえたりして、川に親しむ。

中学年……川の水温や自然度、排水口の様子などを調べ、人と川との関わりに気付く。

高学年……川の水質調査やクリーン作戦などを通し、川を大切にしていこうとする気持ちを育てる。

① 低学年の実践から……1年

金目川の自然に親しみが持てるようにという願いを持って川原を中心に活動したが、土手や周辺の田んぼにも活動が広がっていった。最初は、どの子もウグイの稚魚やアメンボの様子を見ては歓声を上げていたが、次第に各自のめあてに夢中になっていった。

石をひっくり返しながら生き物さがしに熱中する子。川原できれいな石を集めたり、ダムを造ったりする子。土手でバッタやカマキリをつかまえたり、オオバコで草すもうをとったりするなど様々であった。また、水田で働く人にオタマジャクシをとってもらい、大喜びをしていた。自然の中でのびのびと遊び、また地域の人とふれあうことができて、児童は大変満足した様子であった。

写真⑤　魚はこんな所にいるんだ！

② 高学年の実践から……6年

6年生は、金目川にはどのようなゴミがどのくらい落ちているかを調べ、金目川をきれいにするために自分たちが出来ることは何かを考え実践した。

まず、学校前を流れる金目川を上流から四つに区切り、学級ごとに落ちているごみの種類と数とを調べ、まとめることにした。約1時間ほどの調査であったが、予想以上にごみが落ちていた。学校に持ち帰り、学級ごとに分類して数量を出した。

一番多かったのはスーパーのポリ袋で、次いで菓子袋、鉄くず、生ごみであった。中には保温釜・障子戸・リヤカーなどもあり、児童を驚かせていた。

後日、調査結果について学年発表会をした。その中で、「川をきれいにするために6年生みんなで守る約束を決めよう」という提案があり、四つの約束を決定した。この発表会の様子や決めた約束をテレビで全校に放送し、金目川の美化を呼びかけた。「川へ遊びに行くときは、お菓子は持っていかない。」「ごみを捨てそうになっている人に注意した。」などという声が聞かれるようになっている。

写真⑥　だれが捨てたんだろう？

4　おわりに

環境教育は生涯を通しての学習によってなされるものであり、小学校の段階では身近な自然に関わりながら豊かな感性や好奇心を培い、その中で自分たちと環境との関わりについて考えることができれば素晴らしい事と思う。金目川探検で何百匹ものウグイが集団で産卵する様子を見た児童の作文には、「秦野市には、まだこんなに素晴らしい自然が残っていて嬉しかった。私たちが大人になっても、この自然が残っていてほしいです。」という感想を聞くことができた。児童は、この活動で金目川周辺の野鳥の様子や自然の生き物の姿に直接触れる事ができ、自然の神秘に驚いたり、その偉大さや役割りの大切さを感じる事ができたものと思う。さらに、ごみや生活排水による金目川の汚れを肌で感じ、自分たちの生活と自然とを関連づけて見る目を養う事ができたのではないかと考えている。教科学習と共に、このように地域の自然や社会から学んでいくことが、環境に配慮した生活の在り方に気づき、さらには将来、環境を考えた生き方ができる力となるものと考えている。

実践報告

西小学校の愛鳥教育

―学級活動「愛鳥の時間」での取り組みについて―

神奈川県秦野市立西小学校　桐　生　幸　子

1．はじめに

本校は、神奈川県の西部に位置し、丹沢山地の登山口にあたる小田急線渋沢駅の近くにある。

創立より75年が経過し、現在、児童数は943名の大規模校である。学校周辺は、農地や雑木林の宅地化が進んできている。学区の西側には四十八瀬川、北側には水無川が流れ、学校から住宅地を抜けた四十八瀬川沿いには田畑が広がり、まだ緑が残っている地域である。

2．本校の愛鳥教育・環境教育の経緯

本校がある秦野市は、全国でも珍しい「鳥もすめる環境都市」宣言を行い、自然環境を大切にした快適で住みよい都市づくりをめざしている。「鳥もすめる都市」宣言を契機に、市内の小中学校２～６校のモデル校指定を行い、愛鳥教育の啓蒙を図っている。

本校の愛鳥教育は、校舎４階の巣の入り口で釣り糸にからんだヒメアマツバメの救出がきっかけで始まり、翌年より平成２・３・４年度秦野市愛鳥モデル校、平成３・４・５・６・７年度神奈川県愛鳥モデル校の指定を受け、以来、継続して推進してきている。その間、平成３年に全国野生生物保護実績発表大会において環境庁長官賞を受賞した。

平成４年度からは、秦野市教育委員会研究実験校として、小学校における「環境教育」の研究を始めた。単に野鳥の美しい姿、かわいい声に親しむだけでなく、愛鳥教育を環境教育として位置づけて全教育活動に広げ、「ｉｎ・ａｂｏｕｔ・ｆｏｒの環境教育」のテーマで環境教育を推進している。平成５年第１回全国小学校中学校環境教育賞優秀賞を受賞した。

3．愛鳥活動の目的

環境教育に取り組む方法としては、自然に親しむ(in nature)、自然のしくみを調べる（about nature)、自然を護る（for nature）の３つの活動がある。愛鳥教育としても、「親しむ活動」「調べる活動」「護る活動」「呼ぶ活動」の４つの柱を中心に、野鳥を素材として広く自然に目を向け、自然を見つめる目を持つ児童、地球規模で環境を考えられる児童の育成を目指して活動を進めている。

4．活動内容

① *組織*

★　教師

・校務分掌として……教科外指導・愛鳥部（各学年専科１名ずつ７名で構成）

・研究組織として……愛鳥研究部（各学年専科１名ずつ８名で構成）

＊できるだけ両方の担当を兼ねるようにしている。

★　児童の活動

・委員会活動…愛鳥委員会（主に全校へ広める活動）

・クラブ活動…自然探検クラブ（おもに調査活動）

② *目標*

	愛鳥活動の目標	環境との関連
低学年	学校の周りにいる野鳥を中心に親しむことができる。	身近な環境について関心を持つ。
中学年	家の周りにいる野鳥を中心に、進んで観察することができる。	環境についての理解や認識を深める。
高学年	西地区の野鳥を中心に観察し、地区の自然について考えることができる。	環境に配慮した行動をとる。

本校では、上記の愛鳥目標をつくり、愛鳥部・愛鳥研究部・愛鳥委員会・自然探検クラブ・学年の年間計画（次頁）を立てている。

月	活動の主体			
	愛鳥部	愛鳥研究部	愛鳥委員会	自然探検クラブ
4	・年間計画立案		・各クラスへ色ぬりカレンダーと野鳥だよりの配布（月１回）	・野鳥観察グループ ・植物・水生生物観察グループ 観察場所 自然観察園 四十八瀬川
5	・バードウィークの企画 ・早朝探鳥会	・愛鳥ビデオ「夏鳥について」		
6	・早朝探鳥会		・児童朝会での１分間探鳥と野鳥紹介の運営（月１回）	
7				
8	・野鳥アクセサリーづくり講習会		・グリーンマークの収集	
9				
10	・給餌台づくり	・愛鳥ビデオ「給餌活動について」	・『鳥見つけたよカード』の掲示	
11	・給餌活動開始			
12		・教師研修会	・屋上ミニサンクチュアリ管理	
1	・早朝探鳥会	・愛鳥ビデオ「冬鳥について」		
2	・早朝探鳥会			
3	・まとめ	・まとめ		

③　*学級活動での特設時間について*

（ア）目的

現在の教育課程の中では、愛鳥教育の時間をとることはできない。愛鳥教育を充実させ、環境教育の一環として位置づけるには、常時活動だけでは活動に限界がある。

そこで、前ページの系統的な目標に向けて、愛鳥教育がより充実し、円滑な活動になるよう、学級活動の中に明確に位置づけ、「愛鳥の時間」として年間35時間のうち４時間を確保した。

（イ）学年別年間計画

＊下記の指導内容を考慮し、各学年で計画したものである（P17～18）。

学　年	指　導　内　容
１　年	・児童にとって、一番身近なスズメの特徴（生態）を観察させる。 ・学校の周りのいろいろな野鳥に親しみを持たせる。
２　年	・ものさし鳥（スズメ・ヒヨドリ・キジバト・カラス）の特徴（生態）を観察させる。 ・ものさし鳥をもとに、学校の周りのいろいろな野鳥に興味・関心を持たせる。
３　年	・給餌活動の意義を知り、活動を通して野鳥の特徴（生態）を進んで観察させる。
４　年	・留鳥・夏鳥・冬鳥・漂鳥の特徴（生態）を進んで観察させる。
５　年	・西地区の野鳥を観察し、それぞれの地区の環境を調べさせる。
６　年	・野鳥の子育てを観察し、野鳥が住みやすい環境・人間と共存できる環境づくりについて考えさせる。

＊特徴（生態）…野鳥の大きさ・色・動作・鳴き方など

平成７年度　　**愛鳥活動　年間計画**　　No.1

学年	活動＼学期	１学期	２学期	３学期
一年	学級活動	・野鳥絵画展（5月…１） ・ツバメとなかよし（６月…１）	・鳥とともだち（11月…１）	・愛鳥発表会（２月…１）
	常時活動	←生き物ごよみ（月１回）　発見カード→ スズメ日記→ 野鳥日記→ 給餌活動→		
二年	学級活動	・野鳥絵画展（5月…１） ・ツバメの巣の観察（6月…１）	・鳥となかよし（自然観察園に来る鳥）（11月…１）	・鳥のペンダント作り（2月…１）
	常時活動	←生き物ごよみ（月１回）　発見カード→ ←自然観察園に来る野鳥観察→ ←野鳥日記→		
三年	学級活動	・野鳥絵画展（5月…１）	・給餌台づくり（９月…１） ・観察園の鳥調査（11月…１）	・給餌台にきた鳥のまとめ（３月…１）
	常時活動	←観察園・家のまわりの野鳥観察→ ←給餌活動→		
四年	学級活動	・野鳥絵画展（5月…１） ・夏の探鳥会（６月…１）	・愛鳥ビデオ「季節の鳥」観賞（11月…１）	・冬の探鳥会（１月…１）
	常時活動	←運動場に来る鳥調べ→ ・給餌台に来る鳥の調査→		

平成７年度　　**愛鳥活動　年間計画**　　No.2

学年	活動＼学期	１学期	２学期	３学期
五年	学級活動	・野鳥絵画展（5月…１）	・西小学区の探鳥会（12月…１）	・愛鳥活動まとめ（３月…１）
	常時活動	←校庭の桜の木に集まる野鳥観察→（グリーンタイム） ←家の近くや学区で見られる野鳥観察→		
六年	学級活動	・野鳥絵画展（5月…１） ・学区のツバメの巣調査（７月…１）	・ツバメ調査まとめ（10月…１） ・探鳥会（12月…１）	
	常時活動	←プールに来る野鳥調査→ ←環境取材カード→（環境問題について情報集め）		
さざんか級	学級活動	・野鳥絵画展（5月…１） ・四十八瀬川への自然・野鳥観察（6月…１）	・ミカン・カキもぎ（11月…１）	・四十八瀬川への自然・野鳥観察（1月…１）
	常時活動	←愛鳥カレンダー→ ←自然観察園での野鳥観察→ ←給餌活動→ ・ヒマワリ ・ススキ・ミカン ・カキ・給食残飯		

（ウ）活動の実際

ここでは、第１学年の活動を紹介する。

ａ．「つばめとなかよし」６月…１時間

西小バードウィーク･野鳥絵画展で初めて西小の鳥『メジロ』のぬり絵をした児童は、野鳥に興味を持ち始め､生活科の学校探検でもたくさんのツバメを確認した｡飛んでいる時のスピードや急旋回に関心を持った子が多く､観察カードにツバメの絵を描いていた｡そこで、９月から行う予定のスズメ日記や、給餌活動をしながらの野鳥日記の導入として、「つばめとなかよし」を計画した。

学習後、ツバメの巣や、飛んでいるツバメを観察したことを朝の会で報告し合ったり､四十八瀬川探検でもツバメを観察した。また、プールに来るツバメを発見し、水を飲む姿を喜んで観察した。

四十八瀬川探検でもツバメ発見！

第１学年２組　　学級活動案

指導者　釜坂　麻実

１　日　時　　平成７年６月２６日（月）　第５校時

２　場　所　　第１学年２組　教室

３　題　材　　つばめとなかよし

４　目　標

学校や家の周りで見かけるツバメに親しみながら、身近な野鳥や自然に関心を持つことができる。

５　題材と児童

子どもたちは、身近にいる生き物に親しんでいる。例えば、かたつむり、だんごむし、あり、みみずなどが話題にのぼると、体験談や観察したことを次々に発表しあう。

生活科の学校探検で、屋上から学校の周りを眺めたとき、たくさんのツバメが、飛び回っているのを見かけた。その時、ツバメの飛ぶ姿や飛んでいる時のスピードや急旋回に関心を持った子が多く、観察カードにツバメの絵を描いていた。

１年生の愛鳥活動の年間計画では、９月からスズメ日記を開始し、給餌活動が始まる２学期後半から野鳥日記につなげることにしている。

１学期のこの時期に、巣づくりや子育てを身近に目にすることができるツバメを取り上げて、野鳥への関心を育て、学校の周りで見られる野鳥やそれを育む自然環境へも目を向けられるきっかけとなるように指導していきたい。

６　活動計画

・つばめのすづくり・・・・・５月のグリーンタイム
・つばめとなかよし・・・・・本時
・つばめをみたよ・・・・・・６月～７月の常時
・スズメ日記・・・・・・・・９月
・野鳥日記・・・・・・・・・１１月～

７　本時目標

身近に見られるツバメに親しみを持つことができる。

８　展　開

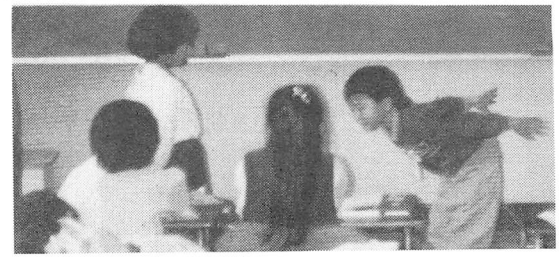
学習活動	指導上の留意点	備考
・ツバメを思い浮かべながら、鳴き声を聴く。	・ツバメの出てくる物語を聴いて、外国でも身近な鳥であることや、渡り鳥であることを知らせる。	・絵本 ・テープ
・ツバメのなぞなぞあそびをする。	・ツバメのからだの特徴や飛び方、くらしについて、楽しく理解させる。	・紙芝居
・ツバメを見たときの様子や知っていることを発表する。	・子育てをしているツバメや親鳥を待つヒナの気持ちを想像させる。	
・ツバメについてもっと知りたいことを発表しする。	・観察する意欲を高めさせる。	
・ツバメのぬり絵をする		・とりの本 ・生き物ごよみ

９　評　価

・身近な鳥としてツバメに親しみを持てたか。

ｂ．「鳥と友達になろう」１１月…１時間

１学期の「ツバメの観察」、２学期の「スズメ日記」「野鳥日記」を通して、愛鳥活動を進めてきた。また、常時活動やグリーンタイムを活用し、スコープで実際に野鳥を見て感想を報告し合う簡単な発表会も経験させた。これらの活動を通して、少しずつではあるが野鳥に対する関心や観察意欲が高まり、



野鳥に対して親しみを持った児童も多く見られるようになった。しかし、野鳥の動作や生態についてまで観察している児童は少ない。

そこで、スズメの観察を振り返り、姿や動作に着目させ、スズメクイズや発表をもとに動作化を取り入れ、楽しく学習させると共に、野鳥の鳴き声を聞かせ、姿をイメージさせるなど、感性を豊かにさせていきたいと考えた。

子ども達は、自分なりの野鳥観察を振り返り、動作化やインタビューを通して、楽しく活動していた。鳥の名前にこだわってしまう傾向の児童に、動作や形・しぐさに着目させようとした意図が伝わり、その後の観察に活かされた。

第１学年２組　学級活動案

指導者　亀山　弘

1　日　時　平成6年11月21日（月）第5校時
2　場　所　1年2組教室
3　題　材　鳥とともだちになろう
4　目　標
・学校の周りにいる野鳥に親しみ、身近な環境に関心を持つことができる。
5　題材と環境教育
児童は、これまでに学校の周りで見られる野鳥について観察を続けてきている。学年の取り組みとして、一学期は「ツバメの観察」を継続し、二学期は「スズメ日記」・「野鳥日記」を通して愛鳥活動を進めてきた。また、常時活動やグリーンタイムを活用し、スコープで実際に野鳥を見て、感想を報告しあう簡単な発表会も継続している。
これらの活動を通して、少しずつではあるが、野鳥に対する関心が高まり親しみを持てるようになった児童も見られる。「プールにはよくツバメがとんでくるよ」「プールの水にすごい勢いで落ちてきたよ」「班長がヒヨドリを教えてくれたよ」「スズメは跳ぶように歩くよ」などの声が聞かれた。話をする児童の姿は、新しい発見に気がついたかのように喜んでいるが、野鳥の動作や生態について、意識的に観察している児童は少ない。
そこで、学校の周りでよく見られるスズメの観察を振り返り、姿や動作にじっくりと着目し、野鳥に対してより親しみのもてる活動が必要であると考えた。本時では、スズメクイズや発表をもとにした動作化を取り入れ、楽しく学習するとともに、これから見られる冬鳥の鳴き声を聞かせ、姿をイメージさせるなど、低学年なりの感性を豊かにさせていきたいと思う。
身近な野鳥に親しみを持つことが、自然のしくみを理解するきっかけとなり、環境全体へ目を向けていく第一歩となるように援助していきたい。
6　活動計画（6時間扱い）
・好きな鳥の絵を描こう（野鳥絵画展）・・・・・・・・・1時間
・ツバメの観察　・・・・・・・・・1時間
・スズメ日記　・・・・・・・・・1時間
・鳥と友達になろう　・・・・・・・・・2時間（本時1/2）
・好きな鳥をみんなに知らせよう　・・・・・・・・・1時間
7　本時目標
・野鳥日記を通して、自分なりの観察の仕方を振り返り、野鳥に対してさらに興味や親しみを持つことができる。
8　展　開

学　習　活　動	指　導　上　の　留　意　点	準　備
・スズメクイズをする。（5つの間違いさがし）	・身近な鳥であるスズメでも、気づかないことがあることを知らせたい。 ・わからない場合は、図鑑を参考にさせる。	・プリント ・鳥の図鑑
・今月に観察できた野鳥を発表し、みんなに知らせる。	・友達と自分の観察の仕方に違いがあるか気づかせたい。 ・動作化やインタビューを取り入れることで、より親しみの持てる活動にする。	・野鳥日記 ・スズメ日記 ・鳥の絵
・野鳥の鳴き声を聞き、鳥のイメージを発表する。	・鳴き声を聞くことで野鳥のイメージを自由に想像させ、今後の観察に意欲を持たせたい。	・野鳥の絵 ・鳴き声のテープ

9　評価
・自分なりの野鳥観察を振り返り、さらに親しみが持てたか。
・スズメクイズや動作化を通して、楽しく活動できたか。

c．「愛鳥発表会」２月…１時間

ツバメの観察から始まり、スズメ日記・野鳥日記をもとに、4～5人のグループごとに野鳥観察の発表会を行った。クイズ形式・劇・ものまねなど、さまざまな発表があった。話し合い・準備など生活科の時間と合わせ、各クラス単位で行った。2年生になってからは、学年発表会を計画している。

④　*常時活動*

（ア）委員会活動

愛鳥委員会では、6つの活動を行い、全校へ広げる活動をしている。

＊一分間探鳥…月1回の児童朝会の時、校舎の周りや校庭にいる鳥を観察している。その際、カレンダーに出て来る鳥の説明もしている。

＊色ぬりカレンダー…鳥に色をぬってカレンダーを作ることにより、鳥に親しみ、特徴を覚えてもらうようにと、鳥の絵と説明をのせたカレンダーを毎月作成し、配布している。

＊グリーンマーク集め…各クラスで集め、台紙に貼ってもらっている。昨年は1年間で苗木券4枚分（8000枚）が集まった。

＊鳥みつけたよカード…学校や家の周りで見た鳥の観察カードを募集し、昼の放送で流し、環境資料室の廊下に掲示している。

＊愛鳥だより発行…月1回、インタビュー・アンケート・クイズなどを掲載し発行している。

＊屋上ミニサンクチュアリの管理…日頃の水やりと冬場の給餌活動を中心に行っている。

（イ）クラブ活動

自然探検クラブでは、野鳥観察グループと植物・

水生生物観察グループの２グループによる活動を行った。野鳥観察の場所は、自然観察園と四十八瀬川である。

（ウ）学校行事・集会等

a．西小バードウィーク

５月の第３週目の１週間を、「身近な環境の中で野鳥に親しみ、野鳥を通して自然保護の精神を養う。」を目的として、西小バードウィークとしている。児童朝会で、野鳥ビンゴ・野鳥○×クイズなどの「鳥の集会」を行ったり、その期間中、野鳥絵画展を行い、廊下に掲示したりしている。愛鳥委員会が各クラス５名に『メジロ賞』を贈っている。また、グリーンタイムに野鳥ビデオを観賞し、クラスで感想や話し合いの時間を持っている。

b．野鳥アクセサリーづくり講習会

毎年、夏休みに親子を対象として行っている。プラスチック板に、自分の好きな野鳥の絵を描き、オーブンレンジで30秒焼くだけである。自分が作りたいアクセサリーに合わせて付属品をつければ、キーホルダー・ネックレス・バッジなどが簡単に作れる。親子で楽しめ、また、夏休みの素敵な思い出にもなると、毎年たくさんの親子が参加し、好評である。

c．親子早朝探鳥会「おはよう探鳥会」

学区を６地区に分け、年４回（５・６月、１・２月）の探鳥会を行っている。大倉・森戸の山間、沼代・堀川の住宅地、そして、四十八瀬川・水無川２本の川と分けて行っている。児童や父母の方々をはじめ、地域の皆さんに野鳥と親しんでもらうために、環境別野鳥調査を兼ねて行っている。

⑤　*教師の研修*

職員研修として、年３回行っている。まず、環境教育を行っていく上で西地域の自然のことはもとより、文化や歴史についても研修していく必要があると考え、夏休みに、講師を招き、「西地区の民話・伝説」の講演を聞いた。11月には、子ども達との楽しい自然観察の仕方について、講師を招き、学校の周辺を実際に歩きながら研修した。１月には、親子早朝探鳥会の１コースでの探鳥会を教師全員で行い、コースの確認や見られる鳥の研修を行った。

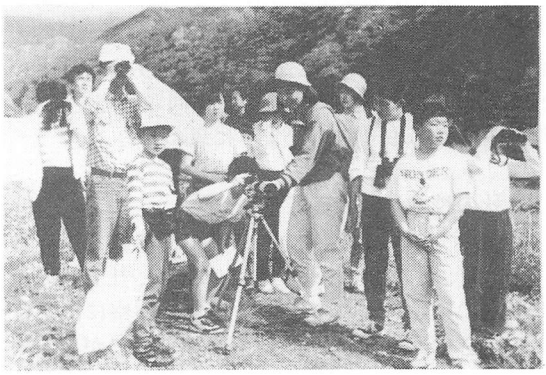
５．おわりに

本校が愛鳥教育・環境教育を始めて、６年が経過しようとしている。先に述べたいろいろな活動を通して、子ども達は、野鳥とふれあい、人と野鳥とのかかわりを学び、自分の住む地域あるいは西地区全体の自然を見つめ、環境について考えることができるようになってきた。これからも、野鳥を素材として、広く自然に目を向けさせ、自然界全体を見つめ、地球規模で環境を考えられる子ども、自然にやさしい子どもを育てていきたい。それに向けて、今後は、次の２つに力を入れていきたい。

① 学校教育活動の中で、学年発達段階に応じた目標や活動内容を考えてきたが、さらに検討を重ね、その中に、数多くの体験学習（in nature）を取り入れていく。

② 家庭や地域との関連をさらに強め、観察フィールドを広げる。

“足元から行動し、地球規模で考えよう”の合い言葉で始まった環境教育。次の世代を担う子ども達が、「地球」という大きな自然の中の一員として考え、自然にやさしい豊かな心をもち、大きくはばたいてくれることを願っている。野鳥のひなが大きく育ち、大空に飛び立つように…。



実践報告

校外学習での自然観察ビンゴ

常務理事　平　田　寛　重

1．はじめに

環境教育の進め方の一つに、自然と親しみ、自然環境への関心を高め、感動する心を培うことや、自然のしくみを学ぶ内容が取り上げられている。また、小学校４年生の理科の学習では、四季折々の自然の変化の様子を学習する内容がある。

私の勤務先の小学校は街中に位置するために、児童は、森や林のような環境で自然にふれる機会がほとんどない。そこで、片道６kmの道のりを歩いて市内の東のはずれにある緑が丘公園（写真１）に行き、校外学習を行った。そこは、クヌギやコナラの雑木が斜面に林立する林で、秋の様子もほどほどに観察することができた。以下、その様子を紹介する。

2．自然観察ビンゴを実施

参加児童は、４年生４クラス160名余りである。時間は９時から15時までで、途中、用水路の見学等もあったので、社会と理科とで時数を計上した。

大人数のため、いちいちガイドをするわけにはいかない。そこで、ウォークラリーの形式をとり、セルフガイド方式による自然観察ビンゴを取り入れ、五感を使った学習として取り組ませることにした。

１周30分ほどの山道に、画用紙（８切を縦に使い、荷札をホチキスでとめたもの）に書いた16の問題（写真２・３）を設定した。児童は、それを見ながら、各人が持っている解答用紙に答えを書いていく。解答用紙は16マスのビンゴにしてゲーム性を高め、関心が高まるようにした。最後に、教師が一つ一つ解説（写真４）しながらまとめをし、答え合わせをして、正解した列の多さで優劣を競うということにした。児童はそれぞれが問題意識を持ち、楽しみながら取り組んだように思われる。

3．秋の校外学習の実際

1994年11月10日（木）、快晴に恵まれた小春日和の一日、秋の校外学習ということで、社会科の西部用水の見学を兼ねて、理科の自然観察に出かけた。田中・東富岡・粟窪・高森と歩き、緑が丘公園まで足を延ばした。住宅街をぬけ、水田地帯を横切り、雑木林を通り、モズの高鳴きを聞き、コセンダングサ・チジミザサなどのひっつき虫を服につけながら進んで行くと、野菊の香りも漂ってきた。やがて、緑が丘公園に着き、休憩をとった後、自然観察を行った。

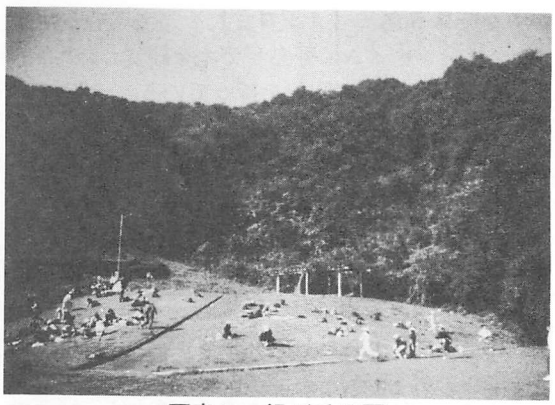


写真１　緑が丘公園

4．問題の作り方

問題を作る際は、児童が五感を使って観察できるように、また、地域性と季節とを生かすように心掛けた。

・じっくりと植物と向き合い、観察を通して新しい発見をしてもらえるようにと、スケッチも多く取り入れてみた。
・二択・三択問題を多く取り入れ、解らなくても考えられるヒントを用意した。
・パスを入れてゲーム性を高め、知っている人でも簡単にビンゴができないようにした。

この他、検索問題を用意すれば、自分で名前を調べるという体験ができるのではないかと思われたので、野菊の検索ということを考えた。しかし、下見の際、あまり目にすることがなかったので、今回は止めにした。ところが、当日歩いていたら、ノコンギクなど５種類の野菊とヤクシソウなど２種類のそれに近い花を見つけることができたので、チャンスがあったら試みたいと思う。

ビンゴ用紙

自然観察ビンゴ

年　月　日 名前

あいているマスの○の中に１～９までの数字を、好きなように入れてください。

○	スケッチ3	○	さんたく１ １　２　３
さんたく２ １　２　３	○	○	スケッチ2
○	○	スケッチ4	○
スケッチ1	さんたく３ １　２　３	○	○

※１．スケッチのらんは、スケッチを書きなさい。
※２．さんたく問題は、正しいと思う番号を一つ○でかこむ。

※３．答え合わせは、後でみんなが終わってから説明しながらします。その時、答えが合っていたら、右下□の中に○をまちがっていたら×を書いてください。

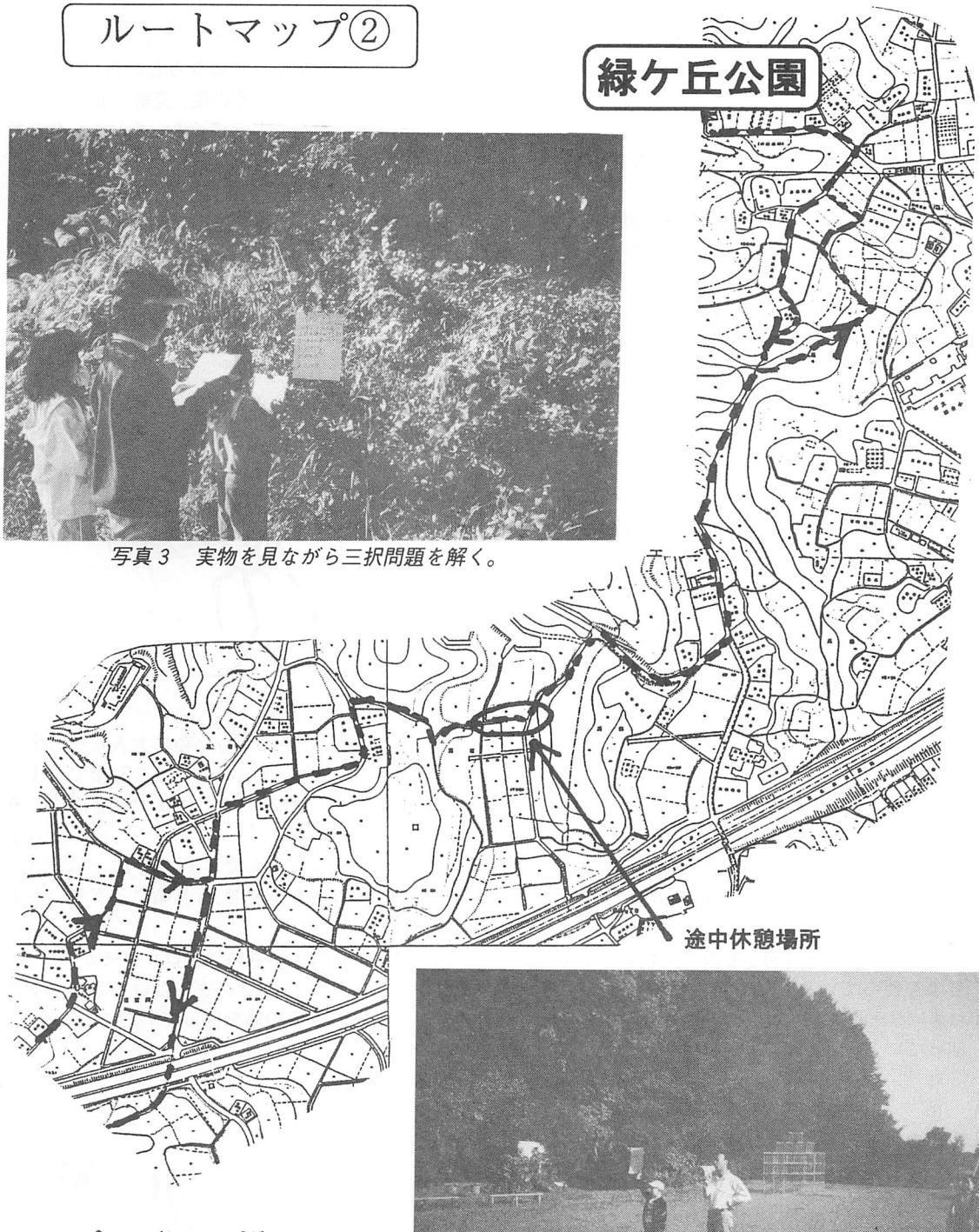
ルートマップ①

学校発	８：４５
途中休憩	９：４０
出発	１０：００
緑が丘公園着	１０：３０
ビンゴの説明	１０：４５
自然観察ビンゴ	１１：１５
食事	１２：００
解説	１３：００
トイレ	１３：３０
緑が丘公園発	１３：４５
途中休憩	１４：００
出発	１４：１０
学校着	１５：００

写真２　実物を見ながらスケッチに取り組む。

ルートマップ②

写真３　実物を見ながら三択問題を解く。



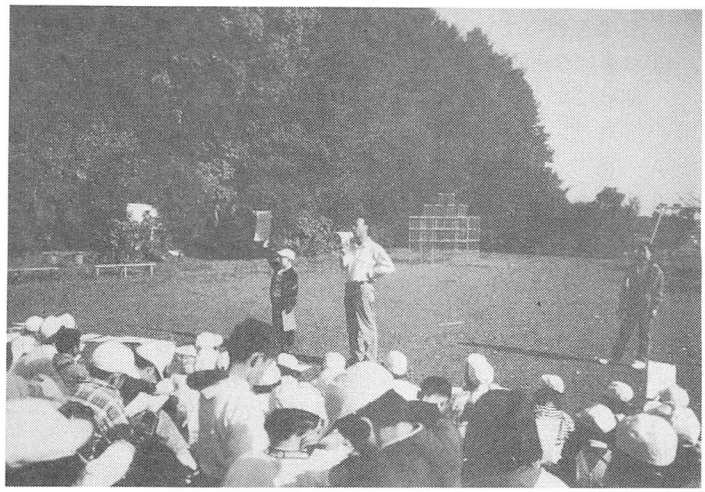


写真４　説明を聞きながらの答え合わせ

5．問題と解説

番号が順番通りでないのは、準備の都合上である。なお、問題は出題順に並んでいる。

① スケッチ4

白い花を1つさがして、スケッチしなさい。

A．白い花は、シロヨメナという野菊の仲間ぐらいしか見られなかった。他に、お茶の花が少し咲いていた。白い花がかいてあれば○。

今の時期、この付近では、野菊の数種類と黄色のヤクシソウ、薄いピンクのコウヤボウキ、ヒヨドリバナ、帰化種の赤いベニバナボロギク、ピンクのタイアザミなどが目につくくらいで少なかった。白い花は、6月頃に多く見られる。

② Q1

「か」が飛んでいるが、さして血をすうのは、オス・メスのどちらか？

A．メス

メスは、卵を産むために栄養のあるものを食べなければならないので、栄養の高い人間の血を吸うのである。

③ 三択3

この木は、「茶」の木です。みんなの知っているお茶・ウーロン茶・紅茶の原料について、次の3つの中から正しいと思うものを1つ選びなさい。

①お茶・ウーロン茶・紅茶の3つとも違うものを使っている。

②ウーロン茶と紅茶は同じもので、お茶だけ違うものを使っている。

③お茶・ウーロン茶・紅茶の3つとも同じものを使っている。

A．③

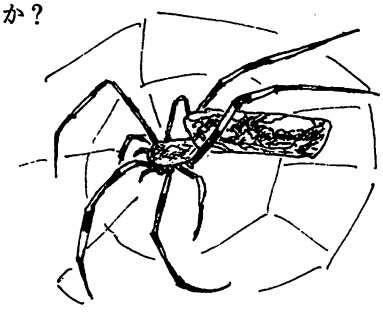
3種類のお茶とも、みんな日本にふつうに見られるお茶の葉と同じものから作ります。でも、色や味がだいぶ違います。それは、作り方の違（ちが）いによるのです。日本茶は葉を発酵（はっこう）させないためにすぐ蒸気（じょうき）で蒸（む）してしまいます。だから、あの緑色の葉の色がお茶に出るのです。けれども、お茶をそのままにしておくと、特に温かいままポットなどに入れておくと、紅茶のような色になってしまいます。あれは、お茶が発酵して色が変わってしまったからです。

ウーロン茶は、葉を日光にさらした後、室内でしおれさせ、発酵させる。その後、発酵を止めるために釜（かま）で数分、煎（い）る。そして、葉を揉（も）んでから乾燥（かんそう）させる。高級茶（こうきゅうちゃ）は茎（くき）を取り除く。

紅茶は摘（つ）んだ葉を室内でしおれさせる。しおれさせた葉を機械で揉（も）んで、発酵を促進（そくしん）させる。高湿度（こうしつど）の中で発酵させて、熱風（ねっぷう）で乾燥させる。

④ Q2

ジョロウグモの網の真ん中にいる大きいクモはオスかメスか？



A．これもメスです。

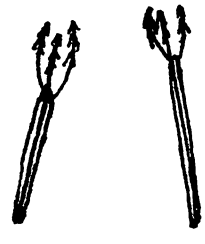
やはり、卵をたくさん産むために大人になるまでに体を大きくします。オスの成長は7月頃で止まってしまいますが、メスは10月頃まで続きます。そして、体を大きくして、けっこんをして卵を産みます。卵を産むと親は死んでしまいます。かわりに、たくさんの卵が冬を越して、5月頃に子グモにかえります。

端（はし）には、小さいジョロウグモがいます。それがオスのクモです。オスグモはけっこんするために、ひっそりとその時を待っているのです。

⑤ スケッチ3

コセンダングサの種のスケッチ

A．右図のように、先にある3本の針の所にかえしの細かい針がかいてあれば○。



⑥　Q３

ナギナタコウジュのにおいは、何ににているか？　また、どんなにおいににているか？

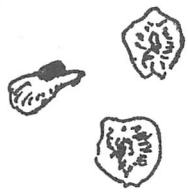
Ａ．シソ科の植物なので、シソの香りがする。

中には、ユズやレモンという柑橘系の果物の香りと答えた人がだいぶいました。一応、書いてあれば○。

家庭で、シソの香りを感じる機会は少ないのでピンとくる人が少なかったようです。でも、十数人の人がシソと答えていて、うれしくなってしまいました。ナギナタコウジュは、花の穂（ほ：花が集まっている所）がなぎなたのような形をしているので、そこから名前がつけられたようです。

⑦　スケッチ２

オトコエシの種のスケッチ



Ａ．種を中心にしてまわりに翼のようなものがかいてあれば○。

オトコエシは白い花が夏の終わり頃から咲き始めます。よく似た花で秋の七草のオミナエシと呼ばれる黄色い花があります。オミナエシは少なくなりましたが、オトコエシはまだ見ることができます。

⑧　Q５

展望台に行って耳をすませてください。あなたの耳には、いくつの音が聞こえますか。数と中身を書きなさい。

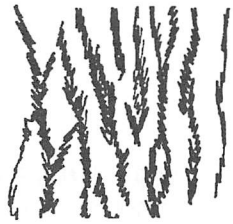
Ａ．車の音、チャイムの音、電車の音、鳥の鳴き声、イヌの鳴き声などが聞こえていた。自分には聞こえなかった音を聞き取る友達がいることはすごいことだ。

⑨　Q６

パス

⑩　Q７

クヌギの樹皮（じゅひ：木の皮の部分）を手で触った感じを書きなさい。



Ａ．ごつごつという感じ。

さらさらやすべすべとは感じられない。ごっつい感じが書いてあれば○。

⑪　Q４

オトコエシの種は、どうしてこんなかたちをしているのか。

Ａ．種のまわりに翼があることに注目してみよう。翼は、やはり、風を受けて飛ぶためにあるので、飛ぶためと書いてあれば○。

では、種は、飛んでどうするのだろう？　タンポポの綿毛のように遠くへ飛んでいって仲間を増やすため。

⑫　Q８

この竹にからんでいるつる草の仲間でオニドコロという。さて、この竹には、どんなしくみでまきついているのだろうか？

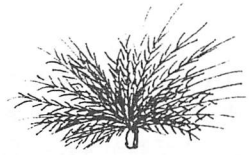
Ａ．アサガオと同じように茎で竹に巻き付く。

茎で巻き付くことが書いてあれば○。

４年で習ったヘチマは、茎ではなく巻きひげというものを出して巻き付く。

⑬　スケッチ１

アザミの綿毛のスケッチ



Ａ．これも、右図のように、種から出ている綿毛が枝分かれしていることがかけていれば○。

アザミの仲間でも、このように枝分かれしているものもあれば、タンポポのように枝分かれしていないものもある。枝分かれしているのは、より引っかかりやすくするためと解釈（かいしゃく）することができる。

⑭　三択１

カラスウリの種のかたちを次の３つのうちからえらびなさい。中身をあけたらだめよ。

A．①

①②③、どれもみんな、へんてこな形をしている。アサガオやヘチマとはだいぶ違う形だ。それぞれに意味があってこんな形になったのだと考えると楽しくなるね。

カラスウリ

ヒシ

オオブタクサ

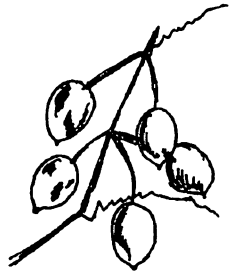
②のヒシは、菱形（ひしがた）に似（に）ているということもあるが、水の上で育つ植物でよく池などで見ることができる。

③のオオブタクサはアメリカからやってきた帰化植物で、最近、秋の花粉症の原因にもなっている。川に行くとよく見られる。

⑮　三択２

この草には、ある鳥の名前が使われている。次の中から選びなさい。

①スズメ
②カラス
③ヒバリ



A．①のスズメ

名前は、「スズメウリ」と言う。赤いカラスウリに比べて小さいからスズメと名がついた。白い実であめ玉ぐらいの大きさ。ちなみに、植物（木や草）の名前には、鳥では、カラス。動物では、イヌの名前がよく使われているようである。カラスムギ、カラスノエンドウ、……。イヌゴマ、イヌタデ、……。

⑯　Q９

この赤い実はガマズミです。ガマズミの味は、あまいでしょうか？　すっぱいでしょうか？　食べたらだめよ。

A．すっぱい

ガマズミの実は赤い色をした小さな実です。６月頃白い花をたくさん咲かせる。ガマズミの実は、赤く目立ち、秋から冬にかけて小鳥たちが食べにくる。ガマズミは人間が食べてもだいじょうぶだが、鳥が食べる実の中には、アセビやドクウツギのように人間が食べると死んでしまうものもあるので気をつけたほうがよい。

６．問題設定上の注意

ビンゴを始める前に、担当者がコースを一巡して、問題用紙を設置する。この時、適切な場所に設置することが大切である。そうでないと、五感を使ったり、じっくり考えたり、スケッチしたりといった活動がスムーズに行われなくなってしまうからである。下見をした時の場所を確認しながら、問題の内容を活かせるように問題用紙を設置していくことが肝要である。

具体的には、逆光の場所は避けたり、スケッチのために安全で広い場所を確保したり、数の多い物を選んだりなどの配慮が欠かせない。出題場所を適当に分散させることも必要である。そうでないと参加者がたまってしまい、混雑・事故等の原因ともなってしまう。

実際には、番号札は、事前の下見の情報をもとに作成しておいたが、本番時に様子が変わっていたり、下見で確認した場所を忘れてしまったり（同じような雰囲気の場所が多いため）して、設置するのに30分もかかってしまった。

また、残念なことに、最後の問題として設定したガマズミの実が途中でいたずら小僧に採られてしまい、後半の児童が見られなくなってしまうというアクシデントがあった。やはり、サンプルには、少しぐらい採られてもだいじょうぶなものを選んだ方がよい。

校外学習新聞　11月号

〔イヌタデ〕

11月10日に、校外学習に行きました。私が一番気にいったのは、イヌタデと言うタデのなかまの花です。ピンク色できれいな花でした。オオバコにている花で、まるで、サンゴショウのような色で、あかるいピンク色でした。歩いていたとちゅうなので、あまり長くは、みれなかったけど、一番心にのこっています。

そのあと、山を下りて緑ケ丘公園で、ビンゴをしました。○(まる)の数は9こだったけれど、ビンゴは、1列もできませんでした。けれど、とても楽しかったです。また行きたいなぁー。

小林 加代子

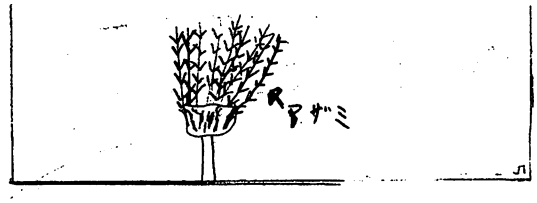
ビンゴ新聞　11月10日

（スケッチ①　②）

11月10日に校外がくしゅうで緑ケ丘公園に行って、4年生ぜんいんでビンゴをしました。

わたしは、スケッチ1のもんだいで、アザミの花のわた毛をかきなさいというもんだいでした。わた毛を見てかんたんだと思ったけど×バツでした。よ〜くみるとえだのようなのがついているのでした。わたしはちゃんとみれればよかったと思いました。

長つかおこう



緑新聞　11月11日(金)

〔オトコエシの種には、羽がある〕

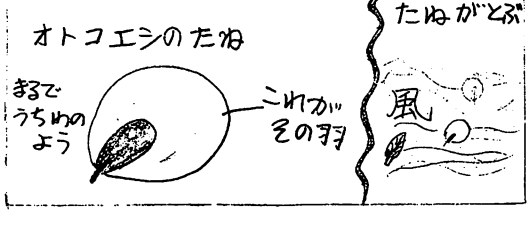
岡田 絵里子

4年生みんなで、11月10日に、校外学習で緑ケおか公園へ行きました。

私は、Q4の問題が好きです。その問題は、「オトコエシの種はどうして、こんな形をしているのか」という問題です。

オトコエシの種は、羽みたいなものがついています。それで、私はすぐにわかりました。それは、風にとばされて、いろんな所へ飛んでいって、なかまをふやせるようにという答えです。

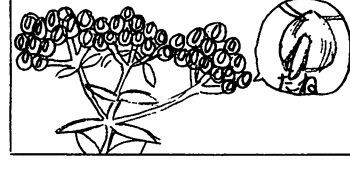
問題をやりおえて、おべんとうを食べたあと、答え合わせをしました。その時、その、Q4が合っていたので、とてもうれしかったです。



緑新聞　11月11日

風にのるかさ

11月10日に緑ケ丘公園にみんなで勉強に行きました。てんぼう台の行く道、帰る道で自然かんさつビンゴをしました。私は、きたいさんといっしょに行きました。そこで、15この問題が出て、1番おもしろい、すごいと思ったのは、「オトコエシ」のたねの形です。まず、「スケッチをしなさい。」と言うことで、たねの形をよく見ると、かさみたいな物がついていました。次にもって行くと、「たねはなぜこんな形をしているのか。」と書いてありました。この問題はむずかしかったので、2人ともなかなか分かりませんでしたでも、「かさ」と言うのを思い出して「風にうまくのるように」と書きました。そして1番にゴールにつけたし、その問題も当たったし、ビンゴが4つもあったので、うれしかったです。でも、つかれました。



横川 睦

『野鳥シート』販売のご案内 および　モニター協力のお願い

常務理事　小　野　紀　之

『野鳥シート』を開発しました。

今回本誌と共に送付いたしました『野鳥シート』《水辺で楽しむバードウォッチング―秋・冬編―》はいかがでしたか。これは新たな活動として始まった教材開発事業の第一弾として当研究会が企画をし、(財)日本鳥類保護連盟によって制作されたものです。

このシートでは、比較的初心者でもゆっくり観察できる冬期の水辺の野鳥を中心に29種類集めました。イラストは、各種図鑑、児童書などで活躍されていらっしゃる松原巌樹氏によるオリジナルのものです。そして、誰もが気軽に自然に親しむきっかけづくりとなるよう、細かい説明は省きました。

（野鳥シートを使用した野鳥観察の指導方法については、P32～36を参照して下さい。）

そして、このシートのもう一つの大きな特長は、野外での使用を考え、耐水性にすぐれたユポ紙に印刷し、さらにラミネートを施してあることです。そのため、観察終了後も下敷きなどとして使うことができます。

ぜひ、学校教育や社会教育などの現場において、この野鳥シートをご活用いただきたいと思います。会員の皆様で、教材としてご購入いただける学校、団体、企業等を御存知の方がいらっしゃれば、ぜひ御紹介ください。事務局より、改めてサンプルを送付させていただきます。

モニターに御協力下さい。

また、今後も引き続きこのような教材を開発していく予定ですので、今回の野鳥シートについての皆様の積極的な御意見をお聞かせください。

アンケート項目としましては、下記の通りです。回答の書式などは特にありませんので、御自由にお書きくださって結構です。

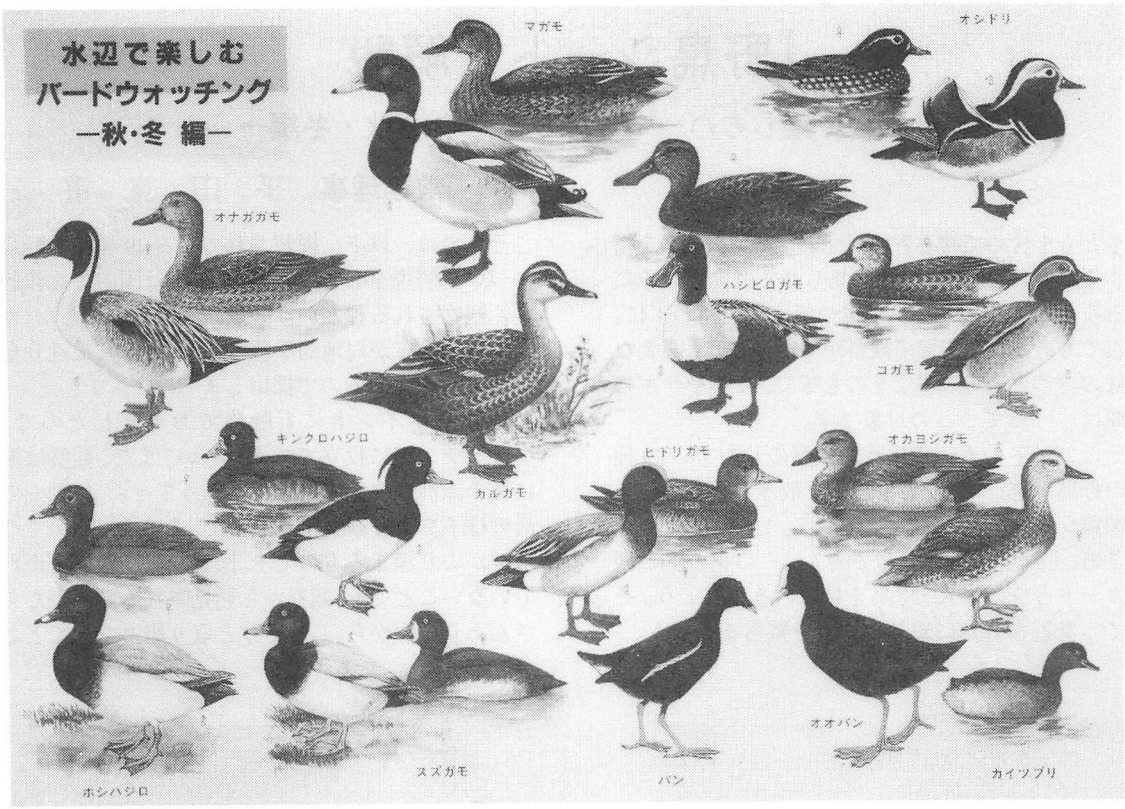
送付先は、注文同様、事務局までお願いいたします。

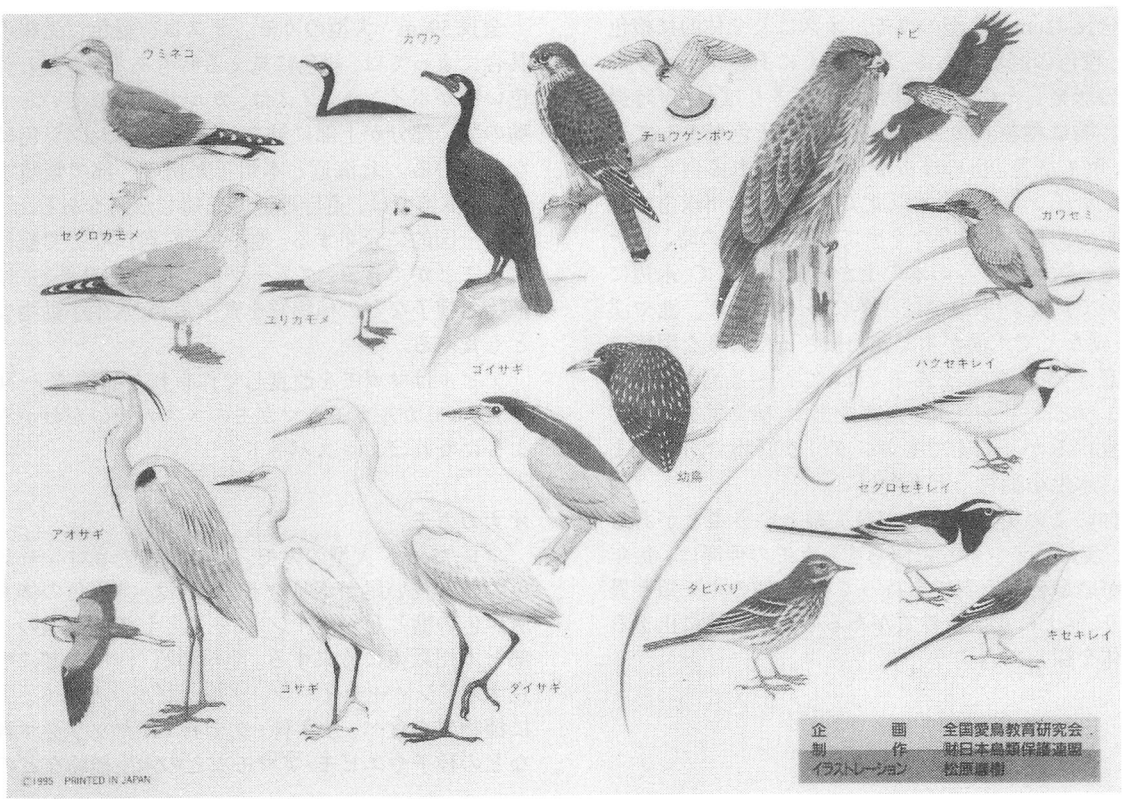
1．シートのサイズ、素材について
2．内容について
　・野鳥の種類および数
　・色、配置
　・説明の有無
　・その他
3．価格について
4．実際に使用してみて
　・御自身の意見、感想
　・教材として使用したときの使用者の感想
　　※行事名、参加者年齢、人数などもお知らせいただければ幸いです。
5．今後、希望されるシート、希望される教材について

価格、購入方法などは、以下の通りです。

商品名　野鳥シート「水辺で楽しむバードウォッチング―秋・冬編―」
価　格　1枚　３００円
※送料実費
※100枚以上の一括購入につきましては、別途見積りをさせていただきますので、御問い合わせください。

〔御注文・御問い合わせ先〕
〒162　東京都新宿区新宿2-5-5　新宿土地建物第11ビル5F　(財)日本鳥類保護連盟内
全国愛鳥教育研究会事務局
TEL. 03-3225-3590　FAX. 03-3225-3593


水辺で楽しむ
バードウォッチング
—秋・冬 編—
マガモ
オシドリ
オナガガモ
ハシビロガモ
コガモ
キンクロハジロ
カルガモ
ヒドリガモ
オカヨシガモ
オオバン
ホシハジロ
スズガモ
バン
カイツブリ


ウミネコ
カワウ
チョウゲンボウ
トビ
セグロカモメ
ユリカモメ
カワセミ
コイサギ
ハクセキレイ
幼鳥
セグロセキレイ
アオサギ
タヒバリ
キセキレイ
コサギ
ダイサギ
企画　全国愛鳥教育研究会
制作　財日本鳥類保護連盟
イラストレーション　松原喜樹
©1995 PRINTED IN JAPAN

『野鳥シート』解説

水辺で楽しむバードウォッチング―秋・冬編―

常務理事　平　田　寛　重

子どもを含めて初心者にバードウォッチングを指導する場合は、近くで大きく見られる野鳥を対象にすることが大事です。双眼鏡や望遠鏡を使わずに、肉眼でもある程度までの観察ができることも必要な条件の一つとなります。その意味で、カモやサギの仲間は、うってつけの対象です。

そこで、冬の水辺で比較的観察のしやすい29種類の野鳥を選び出し、水に強く下敷きとしても使える図鑑シートにしました。

さあ、バインダー（紙ばさみ）にこのシートと観察カードとをはさんで、鳥を見にいきましょう。そして、身近な野鳥に親しむ機会を持ちましょう。

それでは、以下、掲載されている29種類の野鳥について解説をします。この29種は国内で比較的よく観察される種という観点から厳選しました。カワウなど分布が局地的な種もありますが、最近分布が拡大しつつあるので採用しました。

観察のポイントにも触れておきましたので、ウォッチングに役立ててください。また、観察は単に種の識別に終始すべきではありません。行動や生活の様子をよく観察することで、その種についての理解がより深まるものです。図鑑や専門書に書かれていないことでも、観察から発見されることがたくさんありますから、じっくりと取り組んでみて下さい。

オシドリ

全長41cm　小型のカモ。オスは、全体的に橙色で、橙色の冠羽がある。尾の近くにあるイチョウの葉の形をした橙色の風切羽（かざきりばね）が特徴的。嘴は橙色。メスは、全体的に灰色がかって見え、嘴も灰色。目の後ろから後方へ流れる白く細い線がポイント。北日本以北で繁殖し、本州以南で越冬する。木の洞でひなを育てる。巣立ちの時、ヒナは地上数メートルの木の上から飛び降りて、水辺に歩いていく。平地では、冬に多く見られ、池や渓流・湖などで水面が木で覆い被さったような環境に生息する。クェッあるいはクィーと高い声や、ゲェッとかギッと濁った声を出す。植物質を主として食べるが、なかでもドングリが好物である。また、水生小動物なども食べる。

仲のよい夫婦をオシドリ夫婦ということがあるが、実は、オシドリに限らず、カモの仲間は、毎年つがいを替える習性を持っている。他のカモ類と異なり、樹上に止まる性質があるので木の枝に止まる個体を探してみよう。

マガモ

全長59cm　大型のカモ。オスは、緑色（光線の具合によっては、紺色に見える時もある）の頭と黄色い嘴がポイント。メスは、カルガモに似ているが嘴の黒い部分が上部に見られ、周囲がオレンジ色になっている。北海道と本州・九州の一部で繁殖する。北海道では、道庁の池で繁殖した例もある。冬季は全国的に分布する。池や湖沼・河川などで観察することができる。グエーグェグェッと鳴く。主に植物の種子などの植物質を食べるが、水生小動物なども食べる。

アヒルはマガモを改良して作られた品種で、一回り大きい。カルガモとマガモのメスの違いがわかるようになればエキスパート。

オナガガモ

全長75cm　大型のカモ。オスは、チョコレート色の頭と長い尾がポイント。メスは、茶褐色の体で灰黒色の嘴と足がポイント。冬鳥として北海道の一部と本州以南に渡来する。池や湖沼・河川などに生息する。シィーシィーン、プルップルッと鳴く。主に植物質を食べ、イネ科・タデ科・カヤツリグサ科などの種子やエビモ・アマモなどの水生植物などの

芽や葉などを食べるが、水生昆虫なども食べる。採餌のため、水の中で逆立ちをして水底の餌を採って食べることがある。

オナガガモは、メスへのディスプレーとして、首を上下に動かすなどのいくつかの求愛行動を行うので、いろいろ観察してみよう。

カルガモ

全長60cm　茶褐色の大型のカモ。くちばしが黒く、先がオレンジ色になっているのがポイント。足もオレンジ色。オス・メス共に見分けがつかない。北海道の一部では夏鳥として分布し、北海道道南以南では留鳥として生息する。グェグェッと鳴く。主に種子や根などの植物質を食べるが、水生昆虫なども食べる。

東京の大手町にある三井物産ビル前の池のヒナが話題を呼んだが、身近な所でも繁殖している。カルガモの親子を探してみよう。

ハシビロガモ

全長51cm　名前の通り、オスもメスも幅広いへら状の嘴を持つ中型のカモ。オスの頭部は緑色。胸は白く、腹部は赤褐色。目は黄色い。メスは、体は全体的に茶褐色で、嘴は黄褐色。目は黒い。東北南部以南に冬鳥として渡来する。湖沼や河川に生息する。クェックェッと鳴く。植物の種子や水生植物の葉や茎などを主に食べるが、水生昆虫や貝などの動物質も食べる。くちばしが広いのは水の中のプランクトンをこしとって食べるためである。嘴をシャベルのように使って餌を採る様子を観察しよう。

コガモ

全長38cm　小型のカモ。オスは、赤茶色の頭で目の回りに緑色の模様が目立つ。また、下尾筒（かびとう）に黄色い三角模様が見られる。メスは茶褐色で黒い嘴を持つ。国内で見られる一般的なカモの仲間では最も小さい。本州の一部で繁殖するが、一般的には、北海道道央以西に冬鳥として渡来し、河川・湖沼・池などに訪れる。分布域はかなり広い。ピリッピリッと鳴く。植物質を主に食べるが、水生昆虫なども食べる。

繁殖期が近づいてくると、十数羽で１羽のメスの回りを取り囲み、頭と尾を同時に上向きに反らす動作をする。メスとオスのエクリプスの見分けができればあなたはもうプロ級。

オカヨシガモ

全長50cm　中型のカモ。オスは、全体的に黒灰色で、腰の部分が黒い。嘴は黒く、足は黄色。メスは、マガモのメスによく似ているが、嘴の下部だけが黄色い。関東地方や北海道でわずかな繁殖例があるが、ほとんどが冬鳥として本州以南に渡来する。池や河川・湖沼などで見られるが、地味な鳥なのでなかなか話題にされない種である。おしつぶしたような声で、アッアッあるいはゲッゲッと鳴く。植物質を主に食べるが、水生昆虫や小魚類も食べる。

メスはマガモのメスとよく似ているが、大きさが違う点と嘴の色の雰囲気が少し異なるのが識別ポイントになる。

ヒドリガモ

全長48cm　中型のカモ。オスは、胸から頭にかけて赤褐色で、額にクリーム色の模様がある。体は灰色。嘴はライトグレーで先端が黒い。メスは、茶褐色で、オスと同じように灰色の嘴の先端が黒い。足は、オス・メス共に灰色。北海道道南以南に冬鳥として渡来し、海岸・湖沼・河川などに生息する。口笛に似た声でピューウピューウと区切って鳴く。植物の種子や葉などを主に食べる。ヒドリは緋鳥と書き、頭から胸にかけて赤いことに由来する。

キンクロハジロ

全長44cm　小型のカモ。オスは、全体的に黒く、金属光沢が見られる。腹部は白い。メスは、全体的に黒褐色。オスもメスも灰色の嘴、金色の目で小冠羽が見られる。北海道の一部で繁殖するが、ほとんどは、北海道道南以南に冬鳥として渡来し、湖沼や河川に生息する。クックックッと鳴く。水生小動物や貝などの動物質を主に食べるが、植物の種子なども食べる。

ホシハジロ

全長48cm　中型のカモ。オスは、頭部が濃い赤褐色で目が赤い。胸は黒。体は灰色。メスは、胸から頭部にかけて灰褐色で、胴体は灰色。目は黒い。冬鳥として本州以南に渡ってくるが、北海道での繁殖例もある。主に、淡水の湖沼や河川に生息する。クルックルッという声で鳴く。潜水して水草を採って食べる。どの位の時間、水の中に潜っているか調べてみるのもよい。

スズガモ

全長46cm　中型のカモ。オスの頭部は、緑色の光沢が出る黒色。首や胸は黒い。体は灰色。目は黄色。メスは、全体的に黒褐色で、嘴の基部が白い。目は黄色。冬鳥として全国に渡来する。河口付近や海に大群でいることが多い。クックッと低い声で鳴く。潜水して貝や小魚などを食べる。

潜水するカモは重心が低く、潜らないカモに比べると尾羽付近まで水に沈む。潜水するカモには他にどんな種類があるか調べてみよう。

バン

全長32cm　体は、全体的に黒っぽく、背は緑褐色を帯びる。額板は赤く目立つ（冬羽は褪せて黄色っぽくなる）。また、下尾筒の白い三角斑が目立つ。目は赤い。オス・メスはほとんど同じで、外見では区別がつきにくい。全国的に繁殖するが、北日本では冬になると大部分が南下する。湖沼畔・水田・川辺などの湿地に生息する。クルルーッと一声ずつ鳴く。植物の葉や種子を食べる。また、水生小動物なども食べる。足指は長く、草の生えた水辺を歩くのに適している。

バンは、ヘルパーと言って、繁殖時に、最初に巣立ったヒナが下のヒナの子育ての面倒をみることがある。また、下尾筒に白い二つの斑があるが、これにはどんな意味があるのだろうか。観察によって確かめてみよう。

オオバン

全長39cm　体は、全体的に黒く、白い額板が目立つ。オス・メスはほとんど同じで、外見では区別がつきにくい。足は、緑青色で、バンとは異なり、指にヒレがついていて、水上の生活により適したつくりになっている。泳ぎがうまい。目は赤く、幼鳥は、目の後方に白い線が流れている。また、飛ぶと次列風切の先端に白線が出る。北海道・本州・九州の一部で繁殖する。東北以南で越冬する。湖沼やゆるやかな流れの河川などの草の繁茂した環境に生息する。キュイッあるいはクッと聞こえる声で鳴く。主に水生植物を採餌する。小動物も食べる。

水の中に勢いよく潜り、水草を採ってくわえてくることがある。また、採った餌をカモたちに横取りされることもあるので、採餌行動をよく観察してみよう。

カイツブリ

全長26cm　冬羽は全体的に濃淡の褐色。嘴も黄褐色で、目は黄色い。足には、指にそれぞれのヒレがあり、水中を潜るのに都合良くできている。オス・メスほとんど同じで見分けがつかない。全国的に繁殖するが、冬季は本州以南で見られる。湖沼や河川などの止水域でよく見られる。ケレレレレレと聞こえる大きな声で鳴く。水中に潜り、魚やザリガニなどの水生生物を捕えて食べる。飛ぶときに、水上を駆けながら飛び立つ。

どのくらいの時間潜ることができるのか、また、どのような餌を食べているのか、調べてみよう。

ウミネコ

全長46cm　成鳥の背は濃灰色。黄色い嘴で、先端部に赤と黒の部分がある。目と足は黄色。尾羽に黒帯がある。カモメ類は、成鳥になるまで数年を要し、幼鳥・若鳥などは茶褐色で他種と似ており、識別が難しい。オス・メス同色。留鳥として、全国の海岸・河口・海上で通年見ることができる。日本近海の離島や小島で繁殖もしている。繁殖に参加しない若鳥は、港や海岸に生息する。ミャーオミャーオとネコのような声で鳴く。魚類・水生小動物などを食べる。

他の海鳥を攻撃して、餌を横取りすることがある。成鳥と一緒にいる若鳥の色をよく見てみよう。

セグロカモメ

全長60cm　成鳥の背は灰色。黄色い嘴で、下嘴に赤斑がある。足は桃色。目は黄色。オス・メス同色。冬鳥として全国の海岸・港・河口などに渡来する。鼻にかかったキューという声で鳴く。雑食性で魚や残飯など何でも食べる。

よく似ているオオセグロカモメとの背の色の違いを比べてみよう。

ユリカモメ

全長40cm　成鳥の冬羽は全体的に白く、目の後ろ側に黒斑がある。目は黒く、嘴と足の色は赤い。若鳥は、灰色がかっており、嘴と足の色は淡い。全国的に冬鳥として渡来する。河川を遡り、内陸部にも進出している。ギィーという声で鳴く。ダイビングをして魚を捕えたり、水辺に止まって、水面に浮いている小動物を捕えて食べたりする。他の鳥が捕えた餌を横取りすることもある。

最近は、給餌などの影響で、街中の川でも多数の群が見られるようになった。人間への依存性に的を絞って見てみよう。また、夕方、海上のねぐらに向かう途中、群がって鳥柱をつくるので、一度見てみよう。採餌の仕方にもダイビング・追い込み・待ち伏せなどいろいろあるので、どんな餌の採り方をするのか調べてみよう。

カワウ

全長81cm　全体的に黒く、背が褐色がかっている。顔は黄色く、その外側の頬の部分が白い。目は緑色。本州以南に分布するが局地的である。東京の上野不忍池のコロニーは有名である。全般的には、冬に観察チャンスが多い。グルルーンとうなるような声で鳴く。潜水して魚などを捕えて食べる。群で編隊を組んで飛ぶ。水に潜って魚を捕るために羽は防水性がなく、そのため、岩や岸の上で羽を開いて日光浴をする姿がよく見られる。

長良川の「鵜飼い」のウはカワウではなく、ウミウを使っている。

チョウゲンボウ

全長　オス33cm、メス38cm　オスは、グレーの頭部と先端に黒帯のある尾羽を持つ。背は茶褐色。メスはオスより一回り大きく、全体的に茶褐色と黒の斑模様になっている。全国的に分布し、本州の川沿いや海岸や山地の崖地で繁殖する。近年は、鉄橋や橋桁や建物などの人工物に繁殖する例が増加している。冬は、全国の農耕地や河口や海岸などに生息する。キィキィキィと鳴く。ホバリングしながら、空中に止まり、ネズミやバッタなどを捕えて食べる。また、スズメなども食べる。

人工物に繁殖する個体を探してみよう。

トビ

全長　オス59cm、メス69cm　茶褐色の大きめのタカで、翼下面に一対の白い斑が出る。ここが見分ける第一のポイント。また、尾は広げた時にバチ（三味線）型をしている。全国的に留鳥として生息するが、沖縄では稀。海岸部で多く見られる。ピーヒョロヒョロロロというような声で鳴く。

主として死肉を食べるが、魚を捕えて食べることもある。足で捕えた獲物を飛びながら食べることもある。輪を描いて飛ぶところや、上昇気流に乗ってどんどん上空に舞い上がっていく様子を観察してみよう。「とんび」は、4年生の唱歌として親しまれている。

ゴイサギ

全長58cm　成鳥は、背が緑黒色で、腹部が白い。目は赤い。幼鳥・若鳥は、全体的に茶褐色で、淡色の斑や縦斑が見られる。幼鳥の目は黄色く、若鳥になると赤くなる。幼鳥成鳥とも嘴は黒く足は黄色い。本州以南に周年生息し、河川や池沼などの水辺に生息する。夜行性のため、昼間は休んでいることが多い。クワァックワァッと一声ずつ区切って鳴く。水辺での待ち伏せ漁が主で、魚や両生類などを食べる。

目を見て、幼鳥と若鳥の違いが分かるようにしよう。

ダイサギ

全長89cm　シラサギの中では、最も大きい。全体的に白く、冬羽は、嘴が黄色で、目先は淡黄色。東北南部以南に冬鳥として渡来する。関東以西の一部で繁殖する。湖沼や河川に生息する。グァーとしわがれた声で鳴く。魚類・小型哺乳類・ザリガニ・昆虫などを食べる。

足や嘴や目先の色をよく観察してみよう。

コサギ

全長61cm　全体的に白いサギで、嘴が黒く、目元は黄色。足が黒く、足指が黄色い。東北南部以南に留鳥として分布し、河川や湖沼などの水辺に生息する。グワァー、グェーなどと鳴く。魚類・ザリガニ・昆虫などを食べる。

足でかき回して餌を追い出したり、待ち伏せをして採餌したりするなど、採餌行動がいろいろとあるので調べてみよう。

アオサギ

全長93cm　日本産のサギの仲間では、最も大きい。全体的に灰色のサギで、風切羽は黒色で羽ばたくとツートンカラーが目立つ。嘴と足は黄色い。グワァーとしわがれて濁った声で鳴く。全国の河川や湖沼などの水辺に生息する。四国以北で繁殖する。冬は暖地に移動する。魚類・両生類・ネズミなどの小型哺乳類・昆虫などを食べる。

翼を広げて日光浴をすることがある。

カワセミ

全長17cm　コバルトブルーの背中とオレンジ色のお腹がポイント。飛ぶ宝石と呼ばれ、姿が美しく多くの人から注目される。オスは嘴が黒いが、メスは嘴の下側がオレンジ色を帯びる。全国的に繁殖するが、北海道に分布するものは南下する。ツィーという声で鳴く。

水中にダイビングをして小魚などを捕えて食べる。一時期姿を消したが、最近、街中の池や川でも見ることができるようになってきている。

ハクセキレイ

全長21cm　白と黒の模様のセキレイで、セグロセキレイによく似ている。目の下の部分が白いのがハクセキレイで、黒いのがセグロセキレイ。以前は北日本で繁殖していたが、最近は繁殖域が南下している。冬季は南へ移動する。河川の中流部に主に分布するが、最近は水への依存度が減り、市街地に分布が拡大しつつある。これは、食性の許容が広いためと思われる。チチッチチッとキセイレイより濁った声で鳴く。

主に昆虫類を食べるが、菓子類なども食べるので注意して観察してみよう。河川の上流部や山間部への生息域の拡大は、あまり行われていないので、今後、注意深く見ていく必要がある。

セグロセキレイ

全長21cm　白と黒の模様のセキレイで、ハクセキレイによく似ている。目の下が黒いのがセグロセキレイで、白いのがハクセキレイ。ハクセキレイより水に依存する度合いが高い。川でも底が礫地の所に分布が多く、一般的に砂地を好むハクセキレイより上流に生息する。留鳥としてほぼ全国的に分布する。ジジッという濁った声で鳴く。主に昆虫類を食べている。

日本の固有種で、世界で日本にしか生息していない。そのためわざわざ外国からセグロセキレイを見に来るウォッチャーもいる。

セグロセキレイの他にどんな固有種の鳥がいるのか調べてみよう。

キセキレイ

全長20cm　背の部分がグレーで腹部が黄色いセキレイの仲間。足は黄褐色をしている。長めの尾を上下に振るしぐさが目につく。九州以北の平地から高山までの水辺の環境に広い範囲で繁殖し、本州以南で越冬する。高地や北に繁殖する個体は、冬季、南に移動する。街中の目立つ所で囀ったり、物置などで繁殖したりすることがある。チチッチチッとハクセキレイより細く鋭い声で鳴く。昆虫類を主に食べる。

石垣のくぼみや石灯篭などの人工物に繁殖することも多いので、繁殖期の様子も調べてみよう。

タヒバリ

全長16cm　背はグレーがかった褐色で、腹部は淡い黄褐色で縦斑がある。ビンズイとよく似るが、ビンズイは目の後ろに白斑があり、タヒバリにはない。東北の北部以北に繁殖し、東北以南で越冬する。河原や農耕地などに生息する。ピィーッピィーッと細い声で区切って鳴く。植物の種子や昆虫類を食べる。

春になると胸の色が淡く赤褐色がかって夏羽に変わってくるので注意してみてみよう。

鳥たちの街ものがたり　Part 3

“冬の使者” カモ軍団の隠された秘密 ……そして、カモ軍団メンバー

(財)せたがやトラスト協会　佐々木　晶　子
常務理事　杉　浦　嘉　雄

今回の主人公は、1年中見ることができる留鳥のカルガモ以外のカモたちです。“冬の使者”として親しまれている冬鳥のカモ軍団のお話ですから、大変にぎやかになりそうです。

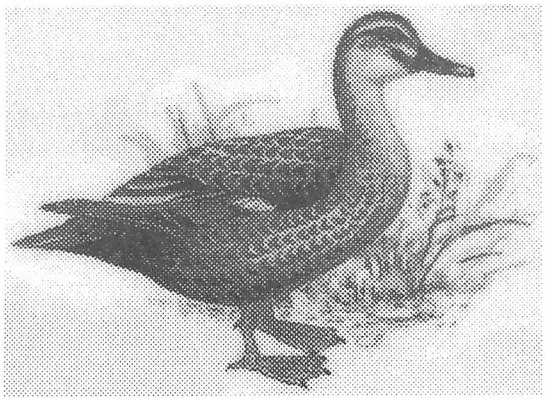
めっきりと寒くなった12月の終わり、私は冬の夕暮を楽しみながら、多摩川の「兵庫島公園」から下流の方へぶらぶら歩いていきました。

ちょうど世田谷と大田区の境のあたりまで来たときでした。ここの多摩川には、いつものようにカルガモたちがいましたが、他にも見慣れないカモたちがたくさんいて、冬の公園の閑散さとは逆に、多摩川はまるで歳末の商店街のような賑わいをみせていました。

茶色のカルガモとは違い、色とりどりのカモがプカプカと漂っていました。私が派手なカモたちを確かめるようにじっくり見つめていると、勝手知ったる顔をして常連のカルガモが近付いてきました。

【マダム・カルガモ】

この辺りもにぎやかになったでしょう。冬はいつもこうなんですのよ。



カルガモ

---ええ、そうですねえ。ずいぶんといろいろなカモさんがいるみたいですが、お友達ですか。---

【そのカルガモさん】

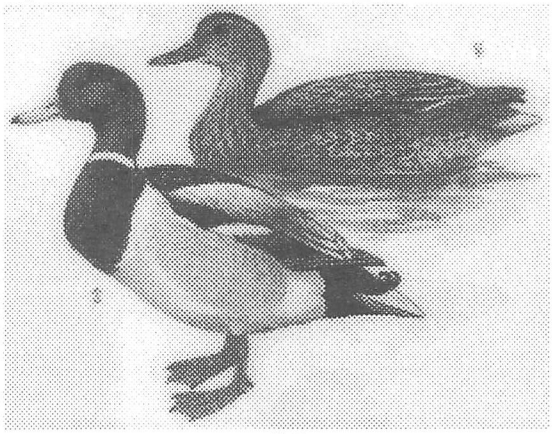
そうね、“冬期限定のお友達”っていうところですね。皆さん、冬の間だけここにいらして、春にはまた北国へ帰って行くんですよ。

---ちょっと、新顔のカモさんたちのことを教えていただけませんか。---

【カルガモさん】

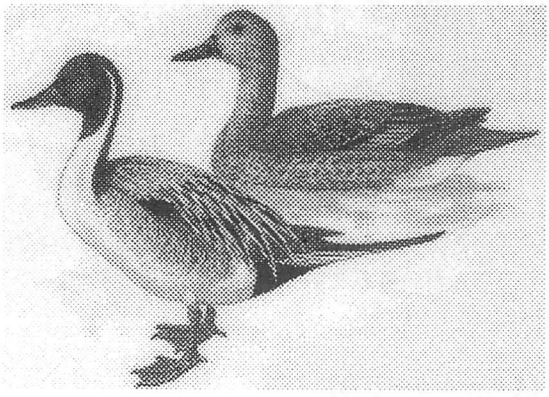
いいですよ。

あの目立つ緑色の頭をしてるのが「マガモ」さん。



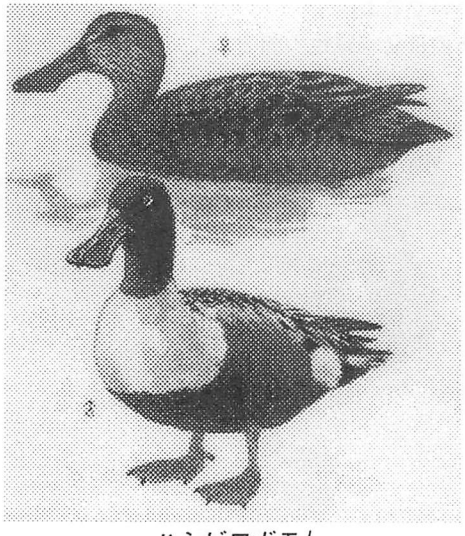
マガモ

その向こうのりっぱな尾羽をお持ちなのが「オナガガモ」さんたち。



オナガガモ

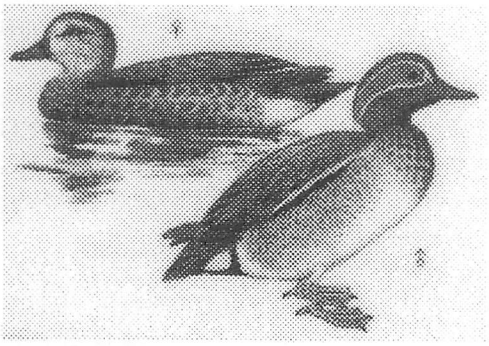
あのクチバシの広いお二人さんは「ハシビロガモ」さんご夫婦。ハシビロガモさんは、あのクチバシで水面上のプランクトンや水草なんかを漉して食べますわ。他の皆さんも頭を水のなかに20秒くらいひょいとつっこんで水草なんかをいただきますの。



ハシビロガモ」

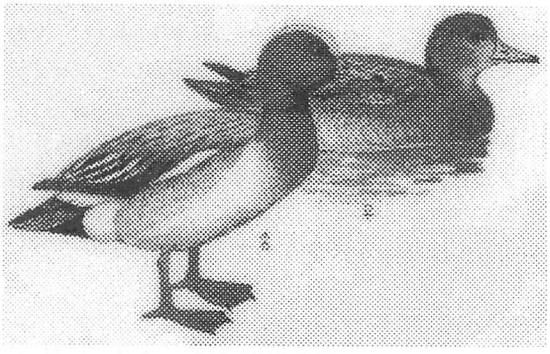
その間に混じったちょっと小柄なのが「コガモ」さんたち。コガモって子どものカモっていうわけじゃなくて小柄なカモさんていうことですわ。

あの方たちはだいたい川の浅いところにおすまいですわ。



コガモ」

あっ、そうそう。中州のうえには、おでこがクリーム色の「ヒドリガモ」さんがいるんですよ。



ヒドリガモ

カモさんたち、餌を取る場所をうまく分けてますから仲良くやっていけるんですの。

ちょっとご紹介しましょうか。コガモさんはこの多摩川に渡ってくるのが、9月頃と一番早いので、知り合いがいますのよ。

奥様風のカルガモさんは「グエッグエッ」と鳴きながら、コガモたちの群れのほうに泳いでいき、またスイスイと緑色のアイシャドウーをしたような一羽のコガモを連れて戻ってきました。

【少年のコガモ君】
はじめまして。僕は今年、シベリアで生まれて日本にくるのは初めてなんです。ぼくたちのことで何か聞きたいことがあるんですか。
ぼくあんまり人生経験がないからよくわからないかもしれないけど、聞いてください。

―――ありがとう。君は今年生まれたばかりっていうけど、一家で日本まで来たのかい。―――

【コガモ君】
そうです。シベリアから一家４人で飛んできました。ぼくの赤ちゃんの頃のかすかな記憶では５人兄弟だったんですが、日本まで飛んでこられる程大きくなれたのは兄さんとぼくの２人だけでした。お母さんの話では卵は１０個産んだって言ってましたけど。

―――シベリアって寒いんでしょう。―――

【コガモ君】
はい。でも夏は餌もたくさんあってぼくたちには暮らしやすい所なんです。
でも冬はとてもとても厳しくて何もかも凍ってしまうから、早く日本に行かなくちゃいけないってお父さんたちに言われて一生懸命飛んで来たんです。

―――そうかあ、３千キロぐらい飛んでいるんだね。すごいんだね、どのくらいかかったの。―――

【コガモ君】
ぼくたちのグループは３週間くらいで、ここに着きましたけど、早いグループは２週間、ゆっくりしている組は１ヵ月ちょっとかかるのもいるって聞いています。
それはぼくたちコガモだけじゃなくて、ぼくたちの後、10月から11月にかけてここに着いた他のカモさんたちもそうだって言ってました。

―――飛ぶときはお父さんの指示に従うのかい。―――

【コガモ君】
いいえ、ぼくたちカモっていう種類は、生まれて育つ間だけ家族で暮らすんです。飛ぶときはおおぜいのグループで行動しますから、もうお父さんもお母さんもあんまり関係ないんです。
日本に無事着けたら、ぼくはぼくでお嫁さんを探すし、皆もまた新しい家族をつくる相手を探さなくちゃならないんです。
飛んでくるだけで精一杯ですから、皆自分のことを守るのに全力を使うんですよ。自分がちゃんとしてるってことは、結局は皆のためになることですから。

―――なるほど、しっかりしているんだね。でもグループには先頭になって飛んだりするリーダーはいるんでしょう。―――

【コガモ君】
それも違います。特にリーダーになる鳥はいません。誰かが飛び立ったらそれに連れだって遅れないように飛ぶんです。ひょっとしたら自分が先頭になることだってあるんですよ。
言ったでしょ、自分がしっかりしなくちゃカモの世界では生きていけないんですよ。

―――うーん、そうかあ。ところで君たちカモは何を目印にして飛ぶのかな。私たち人間の間では、「太陽」とか「星座」を目印にしているだとか、君たちの体のなかに羅針盤みたいな装置があって、それで間違わずに何千キロという距離を行き来できるって考えたりしているんだよね。―――

【コガモ君】
確かにカモは夜行性で鳥目ではありませんから夜も良く目が効きますし、夕暮から夜飛ぶときに星はきれいに見えますけど……。
でも実はぼくにもよくわからないんです。でも飛ばなくてはいけないっていう気持ちに突き動かされるし、自分がいつも正しい方角に飛んでいっているっていう自信はありますよ。不安な気持ちでたくさんは飛べませんから。
じゃあ、もういいですか。今素敵なコガモの女の子を見かけたので、他の男の子より先に声を掛けてみようと思ってるんです。

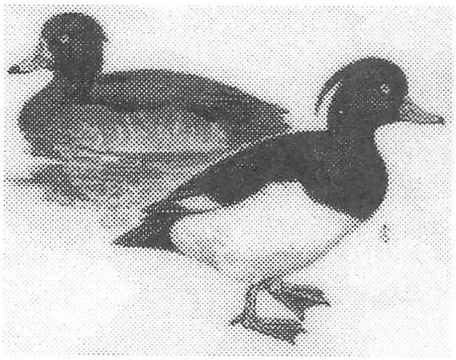
【コガモ君】
あっそうそう、もし、何だったらもう少し川の深い所に行くと、金色の目の「キンクロハジロ」さん

やダイビングの上手な「ホシハジロ」さんが見られますよ。

ーーーああ、じゃましてごめんなさいね。いろいろありがとう。可愛いお嫁さんを見付けてね。ーーー

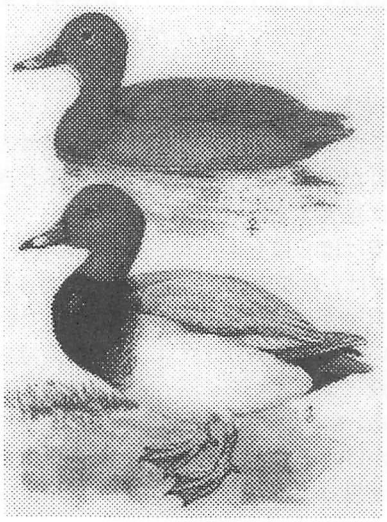
そして私は物はついでと、コガモ君に勧められたように、同じ多摩川でも、もう少し水の深そうな所に行ってみました。

確かにその名の通り黒い体に金色の目をして羽の一部が白く目立つキンクロハジロと、



キンクロハジロ

頭が茶色でゆったりと水に浮かんでいるホシハジロがいました。



ホシハジロ

しばらく見ていると、ホシハジロは水に浮かんでいるというのに、足場でもあるかのように飛び跳ねて頭から水中に潜って見せてくれました。

なるほど、これほど豪快にダイビングするんだから深いところじゃなければ頭を打ってしまうなあと感心しながらゆっくりと元の川べりに戻って行くと、また、さきほどのカルガモさんが近付いてきました。

【マダム・カルガモ】

ホシハジロさんとキンクロハジロさんにお会いになりましたか。

ーーーええ、声は掛けませんでしたが、素晴らしいダイビングをみて来ましたよ。ーーー

【マダム・カルガモ】

あの方たちは本当にお上手で、私たちがちょっと水に頭を入れるのとは大違いですわ。口数の少ないホシハジロさんたちは水草がお好みで、キンクロハジロさんは貝や水生昆虫がお好きなんだってうかがってます。

ーーーなるほどね、一口にカモっていってもいろいろなんですねえ。ーーー

【マダム・カルガモ】

本当にそうなんですよ。これほどいろいろな種類のカモが集まれるっていうこの多摩川は恵まれた場所ですのよ。

でも、最近はだんだん川も汚れて水草も少なくなってきたし、中洲にはときどきバイクなどがやってくるし、心配になることがたくさんありますの。

毎年長い旅をしなければならない他のカモたちが、「ここは餌があるから」っていって冬に顔を見せてくれると本当にほっとしますわ。まだここが私たちカモにとって住みやすい場所だってことですもの。

ーーーそうですね、今日いろいろなカモさんたちを見ましたが、いつまでもここに戻ってきれいな姿を見せてほしいと心から思いましたよ。

長旅の疲れをいやせる場所として多摩川をこのまま自然豊かなところにしておきたいと人間のぼくも本当に願っています。ーーー

論　説

環境教育と愛鳥教育

常務理事　平　田　寛　重

今回は、愛鳥教育の立場から環境教育について考えてみたい。

愛鳥教育は、環境教育の一分野であると言える。そして、環境教育においてもとりわけ重要な部分である「自然への関心を高め、自然のしくみを認識し、自然環境を効果的に活用していくための人間を育てる」分野を担っているといえる。その意味では、日本で従来言われていた自然保護教育のカテゴリーの中に含まれるとも言える。

愛鳥教育は、単に野鳥を対象とするのではなく、野鳥を窓口にし、野鳥を通して自然を見ていくという方法をとっている。それは、身の回りの自然の有り様を五感を通して観察させることにより、ふだん何気なく感じているだけの自然に対する考え方や価値観が一変するからである。そして、自然に対する、より深い感性が磨かれていくからである。

また、それは、生物相互の関わり合いによって自然が形成されていることに気付き、生態学的な知識によって自然のしくみを理解することによっている。

このように、知識と感性とによって磨かれた人間を育てていくことが大切である。

とかく、環境教育と言うと、「地球にやさしい」といったイメージから、リサイクル、低公害、クリーンキャンペーンなど、環境問題に対しての対症療法的な取り組みに目を奪われがちである。そちらの分野の方が、派手で人目を引き、教育的効果も出しやすいからであろう。しかしながら、一過性の強い、また、禁欲的色合いが濃い取り組みは、長続きせず、反動が出やすい側面を持っている。

私たちは、環境に対して問題意識を持ち、環境問題を自分の問題として捉え、その解決に向けて取り組んでいく人間を育てる必要がある。

それには、まず、環境の根本である自然環境について科学的に正しく理解させることが必要である。それが基本であるのは、自然の仕組みや摂理についての正しい認識がなければ、適切な対応をすることは不可能だからである。

また、自然に対しての想いがなければ、問題意識の持続や、問題解決のための粘り強い行動は生まれてこない。継続的な自然観察を通して培われた自然への想いが、行動の原点となり、問題解決の方向性をも示すことになる。

このような考えの下に、自然環境を対象とする取り組みをする場合、生物を媒体として自然を総合的に見ていくことが効果的である。そして、野鳥は、食物連鎖の頂点に立つ点で、その対象として適していると言える。

では、環境教育として、野鳥で何ができるのか。まずは、その特性について考えてみたい。

野鳥は、直接手で触れることができない、静かにしていないとすぐ飛び去ってしまうという短所を持つ。しかし、それ以外の面では、姿・鳴き声が美しい、日中観察することができる、生態系の頂点に位置するため生物相を全体的に把握することができるなどの長所を持つ。

また、前述した二つの短所も、逆に、子供たちの目を野鳥の生活や行動のより深い観察へと向けさせることになり、静かに接するという態度が自然環境へのローインパクトということについての理解を促すことにもなる。

実際の方法としては、まず手始めに、学校周辺のフィールドを使って、双眼鏡や望遠鏡などで鳥を間近に見る機会を持つとよい。間違いなく、参加者したほとんどの子供が感動する。そして、今まで意識したことのない対象を急に身近なものとして示されたことから、子供たちの鳥への関心は、一挙に盛り上がっていく。ただし、「あれは何、これは何、……」と、種名ばかりにこだわっていると、趣味の世界に陥りやすいので、適切な観察ポイントを指示する必要がある。

このような活動を繰り返していくうちに、野鳥の自然界での他の生物とのつながりや、自然界での役割や意味などといったものも見えてくるようになり、生態学的な知識も身についていくのである。

そして、これらの活動は、愛鳥教育のほんの一部であるが、このようなプログラムをこなして培われた知識と感性とが、一人一人の人間のバックボーンとなり、各人が個性を持った人間として、環境問題に対して自分なりの見解に基づいて行動できるようになるのである。

全国愛鳥教育研究会新役員名簿（1996年4月）

《顧問》

柴田　敏隆　TEL. 0468-51-1670
〒238　神奈川県横須賀市平作5-3-20

千羽　晋示　TEL. 03-3727-0639
〒145　東京都大田区上池上3-5-15

柳澤　紀夫　TEL. 0429-64-1568
〒358　埼玉県入間市東町5-1-14

《会長》

江袋　島吉　TEL. 03-3421-1708
〒154　東京都世田谷区上馬2-13-6

《副会長》

渥美　守久　TEL. 0533-57-3405
〒443-01　愛知県蒲郡市形原町佃49-2

杉浦　嘉雄　TEL. 0427-35-1296
〒195　東京都町田市真光寺町1485
ハイツ福屋

《常務理事》

岩淵　成紀　TEL. 022-229-6078
〒982　宮城県仙台市太白区
八木山本町2-17-14 ﾌｧﾐ-ﾙﾊﾟﾋﾟｵ201

梅本　登　TEL. 0425-97-0231
〒190-01　東京都西多摩郡日の出町平井915

小野　紀之　TEL. 03-3753-6484
〒146　東京都大田区久が原3-14-22

島田　利子　TEL. 0463-88-5032
〒259-13　神奈川県秦野市弥生町8-3

杉田　優児　TEL. 03-3322-7767
〒156　東京都世田谷区松原3-38-15
ＴＯＰ明大前ＮＯ３-512

長屋　昌治　TEL. 043-292-7420
〒266　千葉県千葉市緑区椎名崎町876-1
おゆみ野11-46-3

平田　寛重
〒259-11　神奈川県伊勢原市

《監事》

徳竹　力男　TEL. 03-3895-3609
〒116　東京都荒川区東尾久6-40-2

村口　末広　TEL. 03-3412-3186
〒154　東京都世田谷区太子堂5-32-17

《理事》

浅沼　和男　TEL. 04994-2-0262
〒100-11　東京都三宅島三宅村神着218

香月　桂子　TEL. 0427-27-1379
〒194　東京都町田市森野3-11-15-105

武石　干雄　TEL. 09737-2-2202
〒897-44　大分県玖珠郡玖珠町塚脇東町426-10

田中　忠　TEL. 096-380-5301
〒862　熊本県熊本市上南部町1318-21

西村　健一　TEL. 054-635-3518
〒426　静岡県藤枝市高岡3-11-11

林　梅夫　TEL. 0763-32-9527
〒939-13　富山県礪波市杉本37

柳澤　信雄　TEL. 011-851-6364
〒003　北海道札幌市白石区栄町8-3-11

編集後記

秦野市立末広小と西小の実践報告

両校とも、校務分掌への位置づけ、年間計画の作成、教科・道徳での実践、児童会活動などへの展開、父母や地域との関わりなどに様々な工夫が凝らされています。

西小の早朝親子探鳥会は、始めてから6年間続いており、6年間の愛鳥教育を受けた児童が、この3月に卒業していったとのことです。「こういうことは、細くても長く続けていくことに意義がある。」と、担当の桐生先生や教頭先生がおっしゃる言葉の重みを感じました。

野鳥シート（水辺で楽しむバードウォッチング一秋・冬編一）のモニターに御協力を。

詳しくは、P30を御覧下さい。モニターも含めて、会員には1部は無料ということで、本誌と共に同封いたしました。

この『野鳥シート』は、図鑑として手軽に使えるものであること、野外での使用にも耐えられること、指導者向けの資料の添付など、バードウォッチングの現場や愛鳥教育の指導場面で活用できる教材となることを意図して制作されたものです。

指導者向け資料としては、まず、平田寛重氏に「図鑑風解説」を書いていただきました。P32を御覧下さい。これに加えて、いずれ、活用例や実践報告例が発表できればと思っています。

嬉しいことに、現在までに、予想を上回る勢いで各方面で御利用いただいております。会員の皆様にも、奮って御利用いただければと思います。

なお、今後、シリーズを充実発展させ、質の高い教材を開発していく構想がありますので、ぜひ御意見・御希望をお寄せください。

入会案内パンフレットを御活用下さい。

前号で入会案内パンフレットの御案内をいたしました。どうぞご活用いただきまして、会員拡大に御協力下さい。必要部数を発送いたしますので、事務局までご連絡下さい。　（杉田）

役員改選

平成7年度は、役員改選の年度に当たります。会則（第16条1項）に則り、御本人の御承諾と常務理事会の決定とにより、新役員をP42の通り選任しました。任期は2年です。

なお、移動は次の通りです。

〔退任〕

田村活三氏（元顧問）
細谷賢明氏（元副会長）
渡辺研造氏（元監事）

〔新任〕

副会長　渥美守久氏（元常務理事）
副会長　杉浦嘉雄氏（元常務理事）
常務理事　小野紀之氏
監事　村口末広氏（元理事）
理事　香月桂子氏

御退任なさった田村活三氏は、本会発会時の会長であり、その後、顧問として、本会の発展に多大の貢献をしていただきました。

細谷賢明氏も、本会発会以来、副会長として貢献していただきました。

渡辺研造氏も、静岡県支部発会の功労者として、また、監事として貢献していただきました。

お三方の長年の御尽力に対し、この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

愛鳥教育 No.48
平成8(1996)年3月31日

発行人　江袋島吉
発行所　全国愛鳥教育研究会
住　所　〒162 東京都新宿区新宿2−5−5
新宿土地建物第11ビル5F
(財)日本鳥類保護連盟内
電　話　03−3225−3590
FAX　03−3225−3593
会　費　3,000円
郵便振替　00180−7−12442
印刷所　祐文社

愛鳥クイズ

【前回の解答】

1．ふだん街の中で見られるツバメ・コシアカツバメ・イワツバメの３種のツバメについて、名前・姿・巣の形を正しく組み合わせましょう。

［名　前］	ツバメ	コシアカツバメ	イワツバメ
［　姿　］	②	③	①
［巣の形］	C	A	B

2．ツバメは、尾の長さで♂と♀とを見分けることができます。

①尾が長いのは、♂でしょうか？　♀でしょうか？ …… 正解は♂
②電線に止まってよく囀っているのは、♂でしょうか？　♀でしょうか？…… 正解は♂
③交尾の時に上に乗る個体は、♂でしょうか？　♀でしょうか？ …… 正解は♂

3．ツバメは、子育ての時、次の仕事を♂と♀とが仲よくいっしょにするのでしょうか？それとも、♀だけがするのでしょうか？

①巣作り　②抱卵（ほうらん：卵をあたためる）　③給餌（きゅうじ：ひなへの餌やり）

正解：①②③すべて、♂♀が共同で同じくらいの仕事をします。ただし、抱卵は♀の方が長いです。

4．次の中から、ツバメの餌でないものを選んでください。

ａ：トンボのなかま　ｂ：アリのなかま　ｃ：ミミズのなかま　ｄ：ハエのなかま

正解：ｃのミミズのなかま

ツバメは、飛びながら餌を捕えるため、空中に飛び回っている餌でないと捕ることができません。

《参考文献》

日本野鳥の会レンジャー：「あなたもバードウォッチング案内人」，日本野鳥の会，1992
高野伸二：「日本の野鳥」，日本野鳥の会，1982

【今回の問題】

今回は、カモに関する○×クイズです。

1．ヒドリガモは、採餌の時、逆立ちになって餌を採るが、この時、水中で目は開いている。
2．カルガモの足指の色は、オレンジ色である。
3．オカヨシガモのくちばしの色は、オスもメスも同じ色である。
4．オナガガモが水面で止まっている時、足の動きも止まっている。
5．オシドリは、死ぬまで夫婦の相手がかわらない。
6．ホシハジロのオスの目（人間で言う虹彩の部分）の色は、赤い。
7．マガモのメスの尾羽は、カールしている。
8．カモの仲間が都道府県鳥になっている所は、２つある。
9．キンクロハジロの目の色は、オスもメスも同じ色である。
10．カルガモのオスには、エクリプス（繁殖が終わってオスの羽が生えかわる時にメスと同じような羽の模様になること）がない。